

佐賀大学国際交流推進センター 平成30年度 年次報告書

Annual Reports of Center for Promotion of International Exchange
Saga University April 2018- March 2019



佐賀大学

ANNUAL REPORTS

目 次

I. 国際交流ネットワーク	2
1. 学術交流協定	
2. 海外ネットワークの構築と情報発信	2
2.1 佐賀大学海外版ホームカミングデー in ジャカルタ・ジョグジャカルタ	
2.2 佐賀大学プロモーション in ジャカルタ・ジョグジャカルタ	
3. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動	7
II. 学生交流	9
1. 留学生受入れ	9
1.1 留学生受入れの概況	
1.2 佐賀大学短期留学プログラム (SPACE)	
1.2.1 SPACE-E 実施報告	
1.2.2 SPACE-J 実施報告	
1.2.3 SPACE-ARITA 実施報告	
1.3 平成30年度日本語・日本文化研修コース	
1.4 平成30年度日本語研修コース	
1.5 Saga University Summer Program (SUSP) 2018	
1.6 香港中文大学サマープログラム	
1.7 留学生交流支援事業	
1.7.1 短期留学生受入れ支援事業	
1.7.2 特別聴講学生・特別研究学生等 学習奨励費支援事業	
2. 学生の海外派遣	32
2.1 本学学生の海外派遣概況	
2.2 交換留学生の派遣	
2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣	
2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)	
2.5 学生の海外派遣支援 (国際化支援制度)	
3. キャンパスの国際化	51
III. 研究者交流	53
平成30年度佐賀大学国際研究者交流事業	53
IV. 地域国際連携	61
1. 世界とともに発展する SAGAN グローバル人材育成事業	61
2. 佐賀県立武雄高校との交流	62
3. 佐賀地域留学生等交流推進協議会の取組	63
V. その他住環境整備等	65
1. 佐賀大学国際交流会館	65
2. その他の住環境支援	65

I. 国際交流ネットワーク

1. 学術交流協定

平成30年度は学術交流協定締結の基準および手続きの策定を行なった。これまで大学間協定締結の判断はその都度、個別に判断してきており、明確な基準の提示が不十分であった。

これを解決するため、締結基準と手続きを明文化した、佐賀大学学術交流協定取扱要項を平成31年1月に制定し、適正な協定の締結、さらには学術交流が期待できる海外高等教育機関との協定締結を促進することが可能となった。(巻末の資料5参照)

上記の締結基準に基づき、国際交流推進センター運営委員会において大学間協定の審査を行い、平成31年3月27日役員会の審議を経て、平成30年度は活発な学術交流が期待される2件の部局間協定が大学間協定に移行された。

2004年に本学理工学部と学部間協定を結んだスラバヤ工科大学と2016年に同じく理工学部と協定を結んだ国立勤益大学である。いずれも双方向型の研究者交流、学生交流の実績を多数有しており、更なる学術交流の発展や本学の他学部との交流の可能性も大いに期待される。

さらに平成30年度は締結中の全ての大学間・学部間協定の交流状況の把握と整理に向けてのロードマップ作成に着手した。具体的には、平成30年1月現在の大学間協定89件、学部間協定73件の全てを対象に調査を実施し、窓口教員の退職・異動等により交流が途絶え交流が見込まれないものや、交流のインバランスが発生している協定校の確認作業を平成31年度に着手することとして準備を進めた。

2. 海外ネットワークの構築と情報発信

海外ネットワークを構築・強化・掘り起すための一つの取り組みとして、佐賀大学海外版ホームカミングデーを毎年度実施している。今年度は5年ぶりに中国・北京において「佐賀大学海外版ホームカミングデー」を以下のとおり開催した。

	開催日	開催国	都市名
第1回	平成24年3月5日	ベトナム	ハノイ
第2回	平成24年9月10日	中国	杭州
第3回	平成25年8月22日	韓国	ソウル
第4回	平成27年3月10日	スリランカ	キャンディー
第5回	平成27年9月16日	インドネシア	ジョグ・ジャカルタ
第6回	平成28年2月6日	タイ	バンコク
第7回	平成29年2月11日	ベトナム	ハノイ
第8回	平成29年12月9日	中国	北京
第9回	平成31年2月16日	インドネシア	ジャカルタ

2.1 佐賀大学海外版ホームカミングデー in ジャカルタ・ジョグジャカルタ

【日 時】 2019年2月16日（土）14時から16時

【場 所】 ホテルクリスタル サファイアルーム（ジャカルタ市内）

【参加者】 本学出張者、協定校関係者、在インドネシア日本機関・企業、ジャカルタ佐賀県人会、佐賀県、元留学生（39名）他 総勢70名

【式次第】

- | | | |
|-------------------------|--------------------|----------------------|
| ○司 会 | 佐賀大学学術研究協力部国際課長 | 吉田 規雄 |
| | (インドネシア語通訳 元留学生2名) | |
| ○開会挨拶 | 佐賀大学長 | 宮崎 耕治 |
| ○来賓挨拶 | 在インドネシア日本国大使館一等書記官 | 山口 敬一 |
| ○乾 杯 | リアウイスラム大学学長 | シャリフナルディ |
| ○佐賀大学のいまとこれから | 佐賀大学理事・副学長 | 寺本 憲功 |
| ○佐賀大学インドネシア人留学生会発足式 | | |
| 挨拶：ガジャマダ大学 教授 | | スサムト ソモウイヤルジョ |
| 挨拶：ヤマハ・ミュージカル・プロダクツ・アジア | | インデラ ヌグラハ アブデユラー |
| ○友好特使任命 | | |
| 授与者：佐賀大学長 | | 宮崎 耕治 |
| 友好特使：ガジャマダ大学 教授 | | スサムト ソモウイヤルジョ |
| | | ヤマハ・ミュージカル・プロダクツ・アジア |
| | | インデラ ヌグラハ アブデユラー |
| ○元留学生紹介 5人 | | |
| ○閉会の辞 | ボゴール農業大学副学長 | エリカ ブティアルティ ラコニ |

【概 要】

過日、上記日時・場所において、佐賀大学海外版ホームカミングデーを開催した。佐賀大学海外版ホームカミングデーは、海外の協定校との連携強化および海外在住の卒業生と佐賀大学関係者とのネットワーク構築を目的として、2012年から年1回以上開催しているもので、今回で9回目となる。インドネシアでの開催は、2015年9月のジョグ・ジャカルタ開催に続いて2回目、ジャカルタでの開催は初となった。

当日は、宮崎学長、寺本理事・副学長をはじめ、インドネシアの協定校と交流のある学内教職員の他、関係の各協定校の学長・副学長ほか、現地の日本政府・企業関係者や元留学生から総勢70名が出席した。

開会の冒頭、佐賀大学を代表して宮崎学長からの挨拶があり、現在インドネシアと本学とは12の大学間協定、4大学との間で学部間協定を締結していて教育研究の交流を深めていること、インドネシアは今後も本学にとって国際交流の最も重要な地域の一つであることが述べられ、参加者の関心を引き付けた。続いて、来賓を代表して、在インドネシア日本国大使館山口書記官から、お祝いの言葉が述べられ、リアウイスラム大学学長の乾杯により式が進行した。

式中には、インドネシア人留学生会の発足式が行われ、初代会長となるガジャマダ大学のスサムト教授及び世話役となるヤマハ・ミュージカル・プロダクツ・アジアのインデラ氏から、留学生会を通じ、インドネシアにおける佐賀大学関係者の連携を深めていきたい旨の挨拶がなされ、今後の留学生会の発展を期待し、宮崎学長から上記2名に佐賀大学友好特使を委嘱した。

その他、元留学生からは、佐賀大学での留学時代の思い出などを日本語を交えてスピーチがあり、参加した元留学生との間で親交を深め、最後に、ボゴール農業大学副学長からの閉会の挨拶があり、別れを惜しみつつ再会を約し閉会となった。



インドネシア人留学生会発足式 (Susanto 教授)



友好特使任命 (Indra 氏)



集合写真

2.2 佐賀大学プロモーション in ジャカルタ・ジョグジャカルタ

○ボゴール農業大学 (IPB) (2月15日 9時~11時)

(1) 学長表敬訪問

【当 方】宮崎学長、寺本理事、山田准教授、吉田国際課長、出雲国際課主任、山田(佳)国際交流推進センター
コーディネーター

【先 方】Dr. Arif Satria, Rector

Prof. Dr. Dodik Ridho Nurrochmat, Vice Rector for Collaboration and Information System

Prof. Dr. Anas M. Fauzi, Dean of Graduate School

Prof. Iskandar Z. Siregar, Director for International Program

Dr. Sintho Wahyuning Ardie, Deputy Director for International Program Services

- ・ Rector Room での表敬を受けたあと、隣の Innovation Room に移動して、IBP の教育研究活動等について Dr. Arif Satria 学長から説明を受けた。
- ・ 多くの日本の大学とジョインドイグリープログラムを行なっている。千葉大学の地経学、茨城大学と IPB 農工学部、熊本大学のアグリビジネスなど。佐賀大学とは既存の共同研究 (Dr. Yeni) もあるので、共同教育を開始しやすいのではないかとのこと。
- ・ 毎年約1,000人の学生を派遣し、約800人の留学生を受け入れている (短期を含む)。
- ・ サマープログラム等はずでに15プログラムあり、奨学金は支給できないが、宿泊費の免除・減額は行なっている。
- ・ 大学は教育や研究、社会貢献の他にイノベーションという軸をおいている。新しい技術や知識を生産するだ

- けでなく、それらを応用し、いかに社会にインパクトを与えられるかを重視。そのために国立大学ではあるが、複数の関連会社を大学の一部として組織し、研究と市場、研究とコミュニティをつなぐ活動を展開している。
- ・学生の企業家精神を養う教育や支援を重視している。世界で注目を集めるような活動を行なっている若い卒業生がいる。
 - ・200人以上の教員が日本の大学で学位を取得しており、最も多くを占めている。第二はドイツ。



(2) キャンパスツアー (10:00~11:00)

【本 学】 宮崎学長、寺本理事、山田准教授、吉田国際課長

Dr. Arif Satria 学長の案内で、電動カートで移動してキャンパスの各学部・施設及び学生食堂等を視察した。



(3) 学生向け留学説明会

上記キャンパスツアーと並行して別の場所で学生を対象とした本学の留学説明会を実施した。

【説明者】 出雲国際課主任、山田国際交流推進センターコーディネーター

【参加人数】 60名程度

【内 容】

説明資料の投影及びSPACE案内冊子、工学系研究科案内冊子をもとに佐賀大学の概要、交換留学制度、工学系研究科PPGA、SIPOP等について説明した後、質疑応答を行った。学生からは、SPACEに申し込むための要件や、どういった分野の学習や研究が行えるのか、大学院生でも応募可能なのか、といった質問があった。



○ガジヤマダ大学 2月18日13時～15時

(1) キャンパスツアー (13:00～14:00)

【本 学】 宮崎学長、寺本理事、山田准教授、吉田国際課長、出雲国際課主任、山田(佳)国際交流推進センター
コーディネーター

UGM の学生の案内で、電動カートで移動してキャンパスの各学部・施設及び学生食堂等を視察した。



(2) 学長表敬 (14:00～15:00)

【当 方】 宮崎学長、寺本理事、山田准教授、吉田国際課長

【先 方】 Prof. Panut Mulyono, Rector

I Made Andi Arsana, Ph.D. Head, Office of International Affairs

Prof. Dr. Eni Harmayani, Dean Faculty of Agricultural Techology

Pipit, Office of International Affairs

- ・ダブルディグリーまたはジョイントディグリーによる連携に関心がある。現在、高知・愛媛・香川のコンソーシアムや京都大学などと共同教育プログラムを行なっている。
- ・山形大学へは過去5年間で71人の学部学生を1年間の交換留学に派遣している。特定の分野に限定したもの。
- ・ガジヤマダ大学との連携の可能性として、医学では熱帯病理学、材料科学（セラミックなど）、スマート農業などが提示された。
- ・QS ワールドランキングの200位に入ることを目指しており、そのために質の高い研究成果を国際的な学術



誌に発表すること、学生の入学者数を制限し学生に質の高い教育や支援を提供することなどに取り組んでいる。

(3) 学生向け留学説明会（14：00～15：00）

上記学長表敬と並行して別の場所で学生を対象とした本学の留学説明会を実施した。

【説明者】 出雲国際課主任、山田国際交流推進センターコーディネーター

【参加人数】 20名程度

説明内容はボゴール農業大学と同様。多くの学生が、SPACE の存在を知らなかった。また質疑応答では、佐賀大学への留学のための具体的な質問が多かったことから、このように直接協定校の学生へアピールする機会を設けることは、新たな学生交流を創出する上で有効であると感じた。



3. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動

佐賀大学では帰国留学生等を佐賀大学の友好特使として委嘱している。この友好特使を通じて海外の教育・研究情報、現地ネットワークに関する情報の収集や発信を行い、留学生との交流および国際学術交流の推進を図っている。本年度も新たに、2人の方に佐賀大学友好特使を委嘱した。ホームカミングデー in ジャカルタ（2.1参照）の中で、本学で学んだインドネシア人留学生会の発足式が行われ、初代会長のガジャマダ大学・スサントソモウイヤルジョ教授、世話役のヤマハ・ミュージカル・プロダクツ・アジア インデラ ヌグラハ アブデユラー氏から、留学生会を通じ、インドネシアにおける佐賀大学関係者の連携を深めていきたい旨の挨拶がなされた。今後の留学生会の発展を期待し、宮崎学長から上記2名に佐賀大学友好特使を委嘱した。今後、佐賀大学海外同窓会ネットワーク（インドネシア元佐賀大学留学生会）をSNSの活用等により更に強化して行くことに期待している。

委嘱日	国名	名前	所属・職名（委嘱時）	備考
2013/9/20	中国	葛坚	浙江大学 建築工程学院 教授	元佐賀大学教員
		石 坚忍	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
		欧阳 金龙	四川大学 建築・環境学部 准教授	佐賀大学卒業生
		官 冬杰	重慶交通大学 教授	元佐賀大学非常勤研究員
		应 小宇	浙江大学城市学院 准教授	佐賀大学卒業生
		王 纯彬	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
		祁 巍鋒	浙江大学 建築工程学院 講師	佐賀大学卒業生
2013/11/1	日本	副島善文	日本たばこ香港取締役会長、香港佐賀県人会会長	香港中文大学プログラム
2014/1/15	スリランカ	Saliya de Silva	Senior Lecturer, Head of the Dept. of Agricultural Extension, Faculty of Agriculture, University of Peradeniya	佐賀大学卒業生
	タイ	Chollada Luangpituksa	Associate Professore, Vice Dean, Faculty of Economics, Kasetsart University	研究交流・学生交流キーパーソン
	ニュージーランド	Ken Jackson	Research Professor, AIS St Helens; Research Associate and Former Director, Center for Development Studies, Auckland University	研究交流・学生交流キーパーソン
2014/5/30	日本	北村 隆則	香港中文大学 教授、元香港総領事	香港中文大学プログラム
2014/7/7		江頭 利将	セイカン総合エンジニアリング 最高執行責任者 (COO)、上海佐賀県人会幹事長	学生交流キーパーソン
2016/2/6	タイ	Panmanas Sirisomboon	Associate Professor, Department of Agricultural Engineering, Faculty of Engineering, King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang	佐賀大学卒業生
2017/2/11	ベトナム	Ngo Minh Thuy	ハノイ国家大学外国語大学 副学長	研究交流・学生交流キーパーソン
2017/12/9	中国	李 徳勝	北京工業大学 教授	佐賀大学卒業生
		宋 麗紅	天津科技大学 准教授	佐賀大学卒業生
2019/2/16	インドネシア	Susanto Somowiyarjo	ガジヤマダ大学 教授	佐賀大学卒業生
		Indra Nugraha Abdullah	ヤマハ・ミュージカル・プロダクツ・アジア	佐賀大学卒業生

II. 学生交流

1. 留学生受入れ

1.1 留学生受入れの概況

平成22年から平成30年（5月1日）までの過去9年間の留学生数（学位取得を目的とする留学生、交換留学生、研究生）の推移を以下に示す。留学生数は平成19年の332人をピークに減少を続けていたが、平成28年の207人で底を打ち、平成29年には224人と反転、平成30年には240人にまで回復した。

これを国籍別（表1）で見ると、中国人留学生在平成28年度の63人を底に、平成30年度には79人に増えている。これは、日本全体で中国人留学生在数が回復傾向にあることを反映しているものと思われる。また、インドネシア人留学生在も、19人と増えている。また、台湾とミャンマーからの留学生在もそれぞれ増えている。ミャンマー人向けの奨学金（戸上電機製作所奨学金）が創設されたことなどが要因であろう。また、インドネシアに関しては、インドネシア政府（DIKTI）奨学金の受給対象大学から外れたことで、政府奨学金を受給して本学に留学することができなくなったことが影響し、平成27年度までは5名まで減っていたが、平成30年度には19人と回復を見ている。これは交換留学生在が増加したことによるものである。一方で、タイは平成30年度に激減した。これは文部科学省奨学金の受給者が同時期に卒業したことによる特殊要因である。

留学生的の出身国の多様化も進んでいる。過去5年間は20カ国を超えている。平成27年度より始まった ABE イニシアティブによる受け入れ対象国が増加傾向にあり、平成30年度には5カ国に達したことが大きく影響している。地域別に見ると、エジプト、モザンビーク、セネガル、チュニジア、モロッコ、南スーダン、サントメ・プリンシペ、ナイジェリアなど、アフリカ諸国からの留学生在が新規に来日している。

次に、学生的の在籍身分別（表2）の推移をみると、過去2年間は、学位取得をめざした正規留学生在・研究生がやや回復している。ただし、学部生、大学院生の内訳で見ると、平成29年度に大学院生が増加した一方で学部生は減少している。平成30年度には逆に学部生が37人から44人に増加した反面、大学院生は110人と横ばいにとどまっており、安定的な増加傾向にあるとは言えない。

他方、特別聴講学生（交換）・短プロ SPACE（交換）の協定校からの交換留学生在数は50人前後で推移しており、平成30年度には過去最高の64人を記録した。平成25年の SPACE-J 開設に加え、平成29年に新規プログラム（SPACE-ARITA）の開始も下支えし、定員（60人）を上回った。近年は、交換留学経験者が佐賀大学に戻ってくるケースも増えている。上記の大学院生・研究生のうち、7人を占めており、交換留学生的の増加が、正規の大学院生の増加に寄与する流れができつつあると言えるだろう。

今後は、学部の正規学生受け入れの見直しのほか、大学院レベルでは、相手国政府奨学金の獲得を本学からも積極的に支援すること、各研究科が実施する特色ある留学生在受入プログラムや、海外の大学等と連携して実施する共同研究などを促進し、本学大学院への進学を促すなどの方策を引き続き検討する必要があるだろう。

個別国への対応としては、ホームカミングデーを開催するなど、留学生的の誘致に取り組んでいるところである。平成29年12月に中国の北京で、平成31年2月にはインドネシアで開催した。これらに引き続き取り組むほか、積極的な日本留学フェア等への参加や継続的な協定校等への直接的訪問などによる佐賀大学のプロモーション活動、本学で学位を取得し帰国した元留学生在等との交流強化及びネットワークの活用、同時にホームページや SNS 等による広範囲な不特定多数に向けた大学広報等を行うことなどが考えられる。これらはすでに着手しており、一部、効果が見られ始めているが、引き続き取り組んでいく必要がある。

【表1】平成22年～30年 国籍別留学生数の推移

(毎年5月1日集計)

国・地域		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
アジア	中国	162	161	145	136	109	93	63	74	79
	インドネシア	33	33	28	22	17	5	10	11	19
	マレーシア	10	13	20	24	21	20	16	15	19
	韓国	27	21	19	16	16	9	18	17	18
	バングラデシュ	19	15	13	11	7	18	24	26	26
	ベトナム	14	14	18	14	13	17	12	15	14
	台湾	7	11	9	8	14	11	11	8	15
	タイ	5	5	6	11	10	12	19	19	8
	スリランカ	9	10	9	7	8	5	6	6	5
	ネパール	8	7	5	2	2	2	3	1	0
	カンボジア	0	0	1	1	4	1	3	3	5
	ミャンマー	0	0	0	0	0	1	3	5	8
	モンゴル	1	1	1	1	1	0	0	0	0
	パキスタン	1	1	0	0	0	1	1	1	0
	ラオス	0	1	1	0	1	0	0	3	0
インド	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
	小計	296	293	275	253	223	196	189	204	216
中南米	ブラジル	0	0	0	0	0	0	1	0	0
中近東	イラン	0	1	1	1	1	0	0	0	0
アフリカ	エジプト	0	0	0	1	1	2	3	3	2
	サントメ・プリンシペ	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	ウガンダ	1	1	1	1	0	0	0	0	0
	ナイジェリア	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	モザンビーク	0	0	0	0	0	1	2	2	3
	ケニア	1	0	0	0	0	1	1	0	0
	セネガル	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	チュニジア	0	0	0	0	0	0	1	1	1
	モロッコ	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	南スーダン	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	ガーナ	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	エチオピア	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	南アフリカ	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	ルワンダ	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	ベナン	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	2	1	1	2	1	4	9	11	13
北米	アメリカ	0	1	0	2	2	1	1	1	0
	カナダ	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	1	1	0	2	2	1	1	1	0
オセアニア	オーストラリア	0	0	0	0	1	3	1	2	1

ヨーロッパ	オランダ	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	フランス	2	0	1	2	2	1	2	1	3
	フィンランド	0	0	0	0	0	2	1	1	1
	ポーランド	1	1	1	0	0	1	0	0	0
	リトアニア	0	0	0	1	0	1	0	2	3
	アルメニア	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	スウェーデン	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	ベルギー	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	セルビア	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	ドイツ	0	0	0	0	0	0	1	1	3
	トルクメニスタン	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	カザフスタン	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	3	1	2	3	5	5	6	6	10
計	302	297	279	261	233	209	207	224	240	
国数	17	17	17	18	21	23	27	29	26	

※在留資格「留学」の学生数
鹿兒島連大含む

【表2】平成22年～30年 在籍身分別留学生数の推移

(毎年5月1日集計)

在籍身分	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
正規生(学位取得)	205	200	195	187	160	144	135	140	147
うち 学部生	51	54	74	75	71	61	43	37	44
うち 大学院生	154	146	121	112	89	83	92	103	103
研究生	20	22	13	7	4	8	4	11	12
特別研究学生(交換)	2	1	2	3	2	3	3	1	5
特別聴講学生(交換)	33	31	30	25	0	0	0	0	0
短プロSPACE(交換)	20	18	16	24	57	48	55	58	64
科目等履修生	1	3	0	0	0	0	0	0	0
日本語・日本文化研修留学生	1	0	1	1	3	2	4	1	1
連合大学院	20	22	22	14	7	4	6	13	11
計	302	297	279	261	233	209	207	224	240

※在留資格「留学」の学生数
休学含む
鹿兒島連大含む

なお、平成25年10月より日本語で専門科目を履修する交換留学生のための短期留学プログラム(SPACE-J)が開始となり、平成26年度からは、特別聴講学生(交換)に分類されていた留学生は短期留学プログラムに加えられている。

1.2 佐賀大学短期留学プログラム (SPACE)

1.2.1 SPACE-E 実施報告

■コーディネーター

古賀 弘毅 准教授 (国際交流推進センター) 丹羽 順子 准教授 (国際交流推進センター)

1. 平成30年度春学期 (平成30年4月～9月)

■実施概要

平成29年10月に入学した第17期の学生のうち9人が2学期目も続けてSPACE-Eで学修した。そして、4月入学の学生15人を受け入れた。これら計24人の学生の出身国別の人数は、中国人2、台湾人2、韓国人2、インドネシア人9、マレーシア人1、リトアニア人1、フランス人1、オーストラリア人1、カナダ人1、フィンランド人1、ベトナム人1、バングラデシュ人2である。受け入れ学部別に見ると、教育学部4人、経済学部3人、理工学部14人、農学部2人、芸術地域デザイン学部1人となっている。学生は選択の「日本事情研修B」、「日本語」、「異文化交流インターフェース科目」、および各学部が提供している「専門選択科目 (英語による講義)」を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生と、ほかの学部の学生で希望する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題 (以下の表参照) を設定して、受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成30年度春学期時間割

	月	火	水	木	金
I	文法初級Ⅱ 文法中級Ⅰ 会話初級Ⅰ	会話初級Ⅱ 漢字中級Ⅰ	文法初級Ⅰ 文法初級Ⅱ	文法初級Ⅰ 文法初級Ⅱ 文法中級Ⅰ	会話初級Ⅰ 会話初級Ⅱ
II	漢字初級Ⅰ 演習 (B)	文法初級Ⅰ 漢字初級Ⅱ 会話中級Ⅰ	異文化交流Ⅰ	異文化交流Ⅲ (地域社会参加) 異文化交流Ⅲ (倫理)	会話中級Ⅰ
III	聴解中級 (A)	理工学紹介B (オムニバス)		演習 (A)	
IV	第二言語習得・バイリン ガリズム研究入門		SPACE-E 日本事情研修B	DNA、遺伝子、及びゲ ノム	日本に関するWEBペー ジ製作応用 英語論文構成
V	文法発展導入		概説 農学と環境学 (オムニバス)		

「日本語」は、能力別クラスになっており、レベル1 (日本語初級Ⅰ) からレベル6 (上級Ⅱ) までであるが、表には日本語初級Ⅰから中級Ⅰまでをのせている。

春学期の見学等

H30年4月	日本事情研修 (福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮)
6月	日本文化研修 (折り紙)
7月	日本事情研修 (キューピー工場、キリンビール工場見学)

春学期入学者（12か国・地域 19大学 24人）

	国・地域	性別	大学名	在学期間
1	インドネシア	女	リアウイスラム大学	1年
2		男	ハサヌディン大学	1年
3		男	セベラスマレット大学	1年
4		男	セベラスマレット大学	1年
5		男	セベラスマレット大学	半年
6		男	マラン国立大学	1年
7		女	マラン国立大学	1年
8		男	ランブンマンクラット大学	半年
9		男	ランブンマンクラット大学	半年
10	マレーシア	女	トゥンフセインオン大学	1年
11	中国	女	浙江理工大学	半年
12		女	西南政法大学	半年
13	台湾	女	国立中興大学	半年
14		男	国立台北大学	半年
15	バングラデシュ	女	チッタゴン工科大学	1年
16		女	チッタゴン工科大学	1年
17	ベトナム	男	アンザン大学	1年
18	韓国	女	釜慶大学校	半年
19		女	韓国交通大学	1年
20	フィンランド	女	ユバスキュラ大学	半年
21	リトアニア	男	ヴィタウタスマグヌス大学	1年
22	オーストラリア	女	シドニー工科大学	1年
23	カナダ	女	ウィルフリッドロリエ大学	半年
24	フランス	女	ブルゴーニュ大学	1年

自主研究テーマ（平成30年4月～9月）

学部	期間	受入教員	自主研究テーマ（和文）
理	2017.10-2018.9	三島 悠一郎	アブラヤシ栽培場周辺におけるアンモニア除去を目的とした生物ろ過装置としての水耕システムの適用可能性
理	2017.10-2018.9	仮屋 圭史	溝付細径管の沸騰・凝縮伝熱促進に関する研究
理	2017.10-2018.9	宮良 明 男	平面型蒸発器を有するループヒートパイプの冷却性性能に関する研究
理	2017.10-2018.9	宮良 明 男	次世代GWP冷媒の熱物性に関する研究
理	2017.10-2018.9	MD. Tawhidul Islam Khan	膝関節のAE診断についてバイオ統計の応用、データ採掘
理	2017.10-2018.3	柴 錦 春	斜面安定解析法及び事例研究
農	2017.10-2018.9	辻 一成	リアウ県における人間開発指数と一人当たり粗生産額の関係に関する分析

教育	2018. 4 – 2018. 9	角 和 博	1895年から1945年の台湾と日本の女性と性の研究
文教	2018. 4 – 2018. 9	佐 長 健 司	フィンランドと日本の比較研究－学校制度と教育方法を中心に－
経済	2018. 4 – 2018. 9	谷 晶 紅	中日経済協力の発展と見通し－ハイエンド産業について
芸デ	2018. 4 – 2019. 3	石 井 美 恵	佐賀の美術とデザイン
理	2018. 4 – 2018. 9	船久保 公 一	ビッグバン宇宙論の基礎と宇宙論に応用する数値解析法
理	2018. 4 – 2018. 9	矢 田 光 徳	セラミックスナノ粒子顔料の合成と特性評価
理	2018. 4 – 2018. 9	伊 藤 幸 広	コンクリート構造物補強のための K-PREX 工法に用いる検査装置の開発
理	2018. 4 – 2019. 3	奥 村 浩	インドネシアの職業高校でのプログラミング基礎科目における学習支援用ビジュアルプログラミング環境の開発と改良
理	2018. 4 – 2018. 9	花 田 英 輔	院内学級支援システムの構築
理	2018. 4 – 2019. 3	平 瀬 有 人	日本における狭小住宅に関する研究
理	2018. 4 – 2018. 9	柴 錦 春	土のせん断強度を評価する方法
理	2018. 4 – 2018. 9	大 渡 啓 介	金属イオン除去のための吸着剤としての磁性ナノ粒子バイオ複合材料の初級繊維の合成
農	2018. 4 – 2019. 3	藤 田 大 輔	アフリカ稲 O. glaberrima のトビロウカ抵抗性の多様性解析
芸デ	2018. 4 – 2018. 9	三 木 悦 子	「mornings in japan」：使用者自身が様々なフレーバーティーを楽しめる、ヨーロッパ文化のためのティーセットの提案
芸デ	2018. 4 – 2018. 9	三 木 悦 子	「Fitted Space」：省スペースと機能性を持たせた入子状 'DONBURI' の提案
芸デ	2018. 4 – 2018. 9	三 木 悦 子	「Local is Lekker」：日本に関心を寄せる外国人が、その国（地域）の食文化を受け入れやすくするためのコンビネーションプレートの提案

2. 平成30年度秋学期（平成30年10月～平成31年3月）

■実施概要

平成30年10月に新たに第17期の学生20人が入学した。4月に入学した学生人のうち、10月期も続けた5人と合わせて25人がSPACE-Eの学生として秋学期の科目をSPACE-Eで学修した。出身国別の人数は、中国3人、韓国2人、台湾2人、スリランカ1人、インドネシア7人、バングラデシュ1人、ベトナム1人、オーストラリア2人、リトアニア1人、フィンランド2人、アメリカ1人、カナダ1人、フランス1人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部・教育学部7人、芸術地域デザイン学部1人、経済学部4人、理工学部11人、農学部2人となっている。学生は各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」、さらに必要に応じて「日本事情研修A」、「日本語」あるいは「異文化交流」インターフェイス科目を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生および、ほかの学部の学生で希望する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成30年度秋学期時間割

	月	火	水	木	金
I	文法初級Ⅱ 文法中級Ⅰ 会話初級Ⅰ	文法初級Ⅰ 会話初級Ⅱ	文法初級Ⅰ 文法初級Ⅱ 読解中級Ⅰ	文法初級Ⅰ 文法初級Ⅱ 文法中級Ⅰ	会話初級Ⅰ 会話初級Ⅱ 会話中級Ⅰ
II	漢字語彙初級Ⅰ	会話中級Ⅰ		異文化交流Ⅳ（野外手法：言語学） 異文化交流Ⅱ 異文化交流Ⅳ（Ancient and modern traditions of health）	聴解中級（A） 発展経済学（経）
III	漢字語彙中級Ⅰ	漢字語彙初級Ⅱ	我が国の環境保全の最新情報	読解中級Ⅰ Development Economics	パブリックスピーキング（芸・デ）
IV		演習（D） 日本に関するWEBページ製作（教）	SPACE-E 日本事情研修A	概説：応用生化学（農）	理工学紹介A（理）
V		日本と東南アジア関係論（教）			

「日本語」は能力別クラスになっており、レベル1（日本語初級Ⅰ）からレベル6（上級Ⅱ）までであるが、表には日本語初級Ⅰから中級Ⅰまでをのせている。

（全）：全学教育機構 （経）：経済学部 （農）：農学部 （理）：理工学部 （教）：（文化）教育学部

秋学期の視察・見学等

H30年 10月	防災セミナーに参加（異文化交流Ⅳの学生と一緒に）
11月	日本事情研修・A（異文化交流Ⅳの学生と一緒に大観峰見学旅行）
H31年 3月	日本事情研修（羊羹資料館、酒造見学）

SPACE-E 秋学期在籍者（13ヶ国・地域 19大学25人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	リトアニア	男	JASSO	ヴィダウタスマグヌス大学	1年
2	フィンランド	女	JASSO	ユバスキュラ大学	1年
3	フィンランド	男		ユバスキュラ大学	1年
4	アメリカ	男	JASSO	スリッパリーロック大学	1年
5	カナダ	男		ウィルフレッドロリエ大学	半年
6	フランス	女		ブルゴーニュ大学	1年
7	オーストラリア	男	佐賀大学奨学金	ラトロープ大学	半年
8	オーストラリア	女		シドニー工科大学	1年
9	スリランカ	女	JASSO	ペラデニア大学	1年
10	バングラデシュ	男	JASSO	チャッタゴン大学	1年
11	韓国	女		韓国交通大学	1年
12	韓国	女		釜慶大学	半年
13	インドネシア	男	JASSO	マラン国立大学	1年
14	インドネシア	女		マラン国立大学	1年
15	インドネシア	男		セバラスマレット大学	1年

16	インドネシア	男		ブラウイジャヤ大学	半年
17	インドネシア	女		ボゴール大学	1年
18	インドネシア	男		マラン国立大学	1年
19	インドネシア	男		リアウイスラム大学	1年
20	中国	男		浙江科技学院	半年
21	中国	女		浙江科技学院	半年
22	中国	女		浙江科技学院	半年
23	台湾	女		国立中興大学	半年
24	台湾	女		国立中興大学	半年
25	ベトナム	男	JASSO	アンザン大学	1年

平成30年度秋学期（平成30年10月～平成31年3月） 自主研究テーマ

学部	期間	受入教員	自主研究テーマ（和文）
芸デ	2018.4 - 2019.3	石井美恵	モダン有田焼
理	2018.4 - 2019.3	奥村浩	インドネシアの職業高校でのプログラミング基礎科目における学習支援用ビジュアルプログラミング環境の開発と改良
理	2018.4 - 2019.3	花田英輔	院内学級支援システムの構築と評価
理	2018.4 - 2019.3	平瀬有人	日本における小学校に関する研究・提案
農	2018.4 - 2019.3	藤田大輔	アフリカ稲 <i>O. glaberrima</i> の農業関連形質の多様性解析
教	2018.10 - 2019.3	早瀬博範	日本の成り立ち：『古事記』から神道へ
経	2018.10 - 2019.3	中西一	Trends and effectiveness of Japan technical assistance on impacting Indonesia economic growth
理	2018.10 - 2019.9	大渡啓介	カリックス〔4〕アレーン誘導体を基体とするナトリウム選択性イオン交換樹脂の開発
理	2018.10 - 2019.9	福田修	情報可視化プログラミングに関する研究
理	2018.10 - 2019.9	後藤聡	医用システム制御に関する研究
理	2018.10 - 2019.3	杉山晃	放射線とその測定方法について
理	2018.10 - 2019.3	辻村健	レーザー通信のための光学系設計の研究
理	2018.10 - 2019.3	奥村浩	医用画像処理における数値モデルに関する研究
理	2018.10 - 2019.3	奥村浩	QRコードの改善に関する研究
理	2018.10 - 2019.9	猪八重拓郎	地理情報システムを用いた都市形態解析の研究
農	2018.10 - 2019.9	辻田忠志	転写因子 Nrf1 と加齢性疾患との関連解析

平成30年度春・秋学期（平成30年4月～平成31年3月）インターフェースプログラム「異文化交流」科目履修

SPACE-Eの学生は、全学教育機構「異文化交流」プログラムが提供する5つの科目（以下のリストの上から5つ）を履修できた。履修者は、正規学生（日本人学生）や他の国からの留学生との交流を通して日本文化、他の地域の文化を知った。また、リストの一番下の科目（異文化交流Ⅳ：SPACE-Eとの交流）を受講する正規学生（日本人学生がほとんど）と交流授業を持ち、見学旅行を一緒に行った。

春学期

異文化交流Ⅰ	English Story Telling
異文化交流Ⅲ	地域社会の価値再検討：フィールドワーク
異文化交流Ⅲ	Our Life and Ethical Issues

秋学期

異文化交流Ⅱ	Ancient and Modern Traditions of Health in the World
異文化交流Ⅳ	言語学野外手法（Field methods in linguistics）
異文化交流Ⅳ	SPACE-Eとの交流（日本事情研修・Aとの合同授業）

1.2.2 SPACE-J実施報告

■コース概要

SPACE-Jは佐賀大学の協定校に所属する学生を対象としたプログラムである。日本語能力試験（JLPT）N2相当以上の日本語能力を有することが参加の前提である。日本語や日本社会について学べるほか、個々の学生の専攻に応じた授業を日本語で履修できるカリキュラムを提供している。また、必修科目である「日本事情研修C/D」では、学期ごとにテーマを設定し、体験型の学習を行うことで、日本や佐賀についての理解を深めたり、他国からの留学生と交流したりする機会を提供している。

SPACE-Jには、レギュラーコースとブリッジコースの2種類が設けられている。来日当初のプレースメントテストの結果、日本語能力が初中級・中級レベルと判定された学生は、ブリッジコースに参加し、日本語を優先的に学修する。1学期終了後に十分な日本語能力を獲得していれば、レギュラーコースに移ることができる。それぞれのコースの履修科目は下記のとおりである。学生は、1学期あたり最低10単位を修得することが求められる（2018年度春学期入学生より適用）。条件を満たした学生には、修了時に佐賀大学から修了証が授与される。

■コーディネーター

布尾 勝一郎 准教授（国際交流推進センター） 吉川 達 講師（国際交流推進センター）

SPACE-J の履修科目

SPACE-J	レギュラーコース		日本事情研修	必修2単位	1学期あたり10単位以上	
			専門科目等	選択		
			日本語科目	選択		
	ブリッジコース	中級		日本事情研修		必修2単位
				日本語科目		4単位以上
				専門科目等		最大4単位
		初中級		日本事情研修		必修2単位
				日本語科目		8単位以上

1. 平成30年度春学期（平成30年4月～9月）

■実施概要

平成30年度春学期のSPACE-Jプログラムの参加者数は、前年度からの継続者も含めると37人（うち、ブリッジコース8人）であった。ブリッジコースのうち5人は、1学期目の終了後に試験を経てレギュラーコースへ移行、残る3人は、日本語を中心に学修し、半年の留学期間を終えた。

平成30年度春学期の視察・見学等

平成30年6月	日本事情研修（佐賀県立名護屋城博物館、呼子大綱引き）
平成30年7月	日本事情研修（佐賀県立武雄高校訪問、武雄市内見学）

春学期入学者（3ヵ国・地域 12大学 20人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女		遼寧師範大学	1年
2		女	JASSO	浙江理工大学	半年
3		男			半年
4		女		西南政法大学	半年
5		女			半年
6	台湾	女	JASSO	東華大学	1年
7		女	JASSO	輔仁カトリック大学	1年
8		女			1年
9		女			1年
10		女			1年
11		男		文藻外語大学	1年
12		女			半年
13		女			元培医事科技大学
14	韓国	男	JASSO	釜慶大学校	1年
15		男			1年
16		男		韓国教育技術大学	半年
17		女		済州大学校	1年

18	韓国	女		全南大学校	半年
19		男			1年
20		女		培材大学校	1年

■日本事情研修

春学期の日本事情研修Dは、「スポーツと余暇」をテーマとして、柔道体験や自分の国の遊びの紹介、日本人の余暇に関する調査を通じて、スポーツと余暇の位置づけについて自分の文化と比較しながら理解を深めた。その他、学外研修として、佐賀県立武雄高校を訪問し、高校生と交流し、部活動の見学やインタビューも行った。また、中国大陸や朝鮮半島と日本との間の交流についての学びを深めるため、佐賀県立名護屋城博物館および唐津周辺の見学を行った。加えて、日本の祭りを体験してもらうため、呼子町の大綱引きに参加した。

2. 平成30年度秋学期（平成30年10月～平成31年3月）

平成30年度秋学期のSPACE-Jプログラムの参加者数は、前学期からの継続者も含めると36人（うち、ブリッジコース5人）であった。ブリッジコース参加者全員が1学期終了時にレギュラーコースへ移行した。

平成30年度秋学期の視察・見学等

H30年 11月	日本事情研修（九州陶磁器文化館、窯元見学・絵付け体験、長崎県波佐見町、有田町）
----------	---

秋学期入学者（7カ国・地域 15大学23人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間	
1	中国	女		遼寧師範大学	1年	
2		女			1年	
3		女	JASSO	浙江理工大学	半年	
4		女		北京工業大学	1年	
5		女			1年	
6		男		西南政法大学	1年	
7		女		首都師範大学	半年	
8		女			半年	
9		女			半年	
10		台湾	女		華東理工大学	1年
11			女			1年
12			女			1年
13	韓国	女		安東大学校	1年	
14		男			1年	
15		男		木浦大学校	1年	
16	台湾	女	JASSO	国立政治大学	半年	
17		男		国立連合大学	1年	
18		男	JASSO	国立中興大学	1年	

19	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学	1年
20		女	JASSO	ハノイ外国語大学	1年
21	インドネシア	女	JASSO	ガジヤマダ大学	1年
22	リトアニア	女	JASSO	ヴィタウタスマグヌス大学	半年
23	タイ	女	JASSO	チェンマイ大学	1年

■日本事情研修

秋学期の日本事情研修Cでは、前年度に引き続き、「文化の往還」をテーマとして、「現代の文化」がどのような経路を通じて伝播したのか、またそれがどのように変形して世界に広がり、逆輸入されたのかを調査し、「私が見つけた文化の往還」と題して発表を行った。日本発祥の文化の例として、ゲストスピーカーを招いて折り紙の歴史と現代的な発展について講義を受けた。また、大阪大学の教員による遠隔授業で、「変身」と宗教の関係について学んだ。また、学外研修としては、日本の磁器発祥の地である有田町の佐賀県立有田陶磁器博物館を学芸員の解説を交えて見学したほか、近隣の長崎県波佐見町の窯元で工房を見学、絵付け体験も行うなど、佐賀周辺の歴史・文化についての知識を深めた。また、今年度の新たな試みとして、長崎の原子爆弾の被爆者の講話を聞き、話し合うことで、戦争について考える貴重な機会を得た。

■奨学金

平成30年度は、JASSO 奨学金の申請が採択され、12人に対して支給が可能となった。審査の結果、春学期入学者4人、秋学期入学者8人に支給した。とりわけ、秋学期は東南アジアの学生を4人、リトアニアから1人を受け入れることができた。プログラム参加学生の出身地の多様化、ひいては佐賀大学の日本人学生との交流機会の多様化に貢献したと考えられる。



呼子大綱引き



絵付け体験

1.2.3 SPACE-ARITA 実施報告

■コース概要

SPACE-ARITA は佐賀大学の協定校に所属する、芸術・デザイン分野の、主に陶磁器による表現を専門的に学ぶ学生を対象としたプログラムである。在籍校にて陶磁器の授業やプログラムを履修していることが参加の前提である。メインプロジェクトである「自主研究 C/D」を軸に、肥前地区の窯業について学ぶフィールドワークである「日本事情研修 E/F」、さらに各自の研究や興味関心により、佐賀大学学生に開講されている授業を共に受講することで、専門性を高めることができる、ユニークで柔軟なカリキュラムを提供している。交換留学生は SPACE-ARITA のプログラムの中で、日本人学生や地元の人々との学術的で有意義な交流を通じて、日本の社会や地域の人々への認識や理解を深めることができる。

また、学期が始まってひと月経った頃に、自己紹介を兼ねたパネルプレゼンテーションを本庄キャンパスで開催している。これは SPACE-ARITA の学生と本学学生との交流の場をつくるとともに、平成27年度に新しく交流協定が締結された Burg Giebichenstein University of Art and Design Halle/GERMANY（以下 BURG/Halle）と Design Academy Eindhoven/THE NETHERLANDS（以下 DAE）の、両校での授業内容やキャンパスライフ、現地生活情報などを本学学生に提供する目的でもある。SPACE-ARITA では DAE および BURG/Halle からの学生を受け入れることが多いためである。そうすることで本学学生が将来留学を目指す動機付けになることを期待している。

履修科目は以下の表のとおりである。

学生の最低履修要件は、各学期12単位以上で、修得した単位は佐賀大学の成績証明書として発行される。また、留学期間の終わりに、要件を満たした学生は佐賀大学から修了証が授与される。学期終了後に、この修得した単位数を、学生の在籍校の国際課またはそれに相当する課に報告する。

■コーディネーター

三木 悦子 講師（芸術地域デザイン学部）

■指導教員

※留学生の研究内容により各研究段階によって専門分野の教員が指導する。

田中 右紀 教授（芸術地域デザイン学部）

赤津 隆 教授（芸術地域デザイン学部）

湯之原 淳 講師（芸術地域デザイン学部）

甲斐 広文 講師（芸術地域デザイン学部）

三木 悦子 講師（芸術地域デザイン学部）

SPACE-ARITA の履修科目

SPACE-ARITA	必修科目	自主研究 C/D	6 単位	1 学期あたり 12 単位以上
		日本事情研修 E/F	2 単位	
	選択科目	ロクロ成形 I / II / III	2 単位	
		石膏型成型 I / II / III	2 単位	
		陶磁器成形技法 I / II / III	2 単位	
		装飾技法 I / II / III	2 単位	
		釉薬化学 I / II	2 単位	

■ 「自主研究 C/D」

「自主研究 C/D」は交換留学生のメインプロジェクトで、週の大半をこの時間に費やす。最初に、有田で習得したい内容の研究テーマを設定し、基本的に毎週行われる教授とのミーティングを経て方向性を決定する。そして、相互に関連する「日本事情研修 E/F」と共に、研究への調査や試作・試験を行い、プロジェクトの内容を充実させる。各自の研究テーマに即し、ここではアイデアの設計、型作りから生地成形、焼成等、焼物に関わる全ての過程を学習し、スケジュールを含むプロジェクトを学生自身で管理する。肥前窯業圏特有の専門的な知識によるアドバイスや技術指導は、ミーティングで確認し、それぞれの進捗に合わせて専門教員が適宜行う。

最後に、研究の軌跡をまとめた Booklet 作成と、学期終了後に最終プレゼンテーションを有田キャンパスにて企画し、開催する。これは SPACE-ARITA は有田キャンパスを中心に「自主研究 C/D」や「日本事情研修 E/F」において肥前窯業圏で様々な企業や作家、団体、また窯業技術センターや九州陶磁文化館、有田町歴史民俗資料館などの公的機関と関わりながら学習すること、そして有田町での生活を通して学生が関わった地域住民に還元する目的で行う。最終プレゼンテーションには佐賀大学の教員や学生、肥前地区の窯業関係者、地域住民、メディアなど、約50名の方々が参加する。

■ 「日本事情研修 E/F」

「日本事情研修 E/F」では、佐賀県のやきもの、主に肥前地区における陶磁器産業の現場の見学や、美術館や博物館の見学などの歴史的な観点から、主要産業について学び、やきものへの理解を深める。日本磁器発祥の地でもあり、世界にも羽ばたいた有田焼の特異性と、肥前窯業圏の様々なやきもの表現、陶磁器産業の歴史や現在を、やきものを通して、また日本文化を通してその奥深さに触れる。見学先の調査や意見交換を行い、他国の陶磁器産業との比較を通して、相対的にやきものを見ることで、改めてやきものについて考える機会とする。ここでは留学前に描いていた日本の陶磁器やそれに関連する文化等の違いや新たな気づきを得る。

週1回、全15回の授業想定であるが、窯業関連の様々なところに出向き、見学する、半日や1日のフィールドワークを主として行う。自主研究との関連性を深めるため、基本的には学期の初旬（前期：4月～5月、後期：10～11月）にかけて行う。最後に、調査・見学の軌跡をまとめた Booklet を作成する。

1. 平成30年度春学期（平成30年4月～9月）

■実施概要

平成30年4月にオランダ DAE より南アフリカ人1名、ドイツ BURG/Halle よりドイツ人2名、計3名の学生を芸術地域デザイン学部芸術表現コース有田セラミック分野にて受け入れた。学生は、必修科目である「自主研究D」と「日本事情研修F」、選択必修の「ロクロ成形I」または「石膏型成型I」、そして「装飾技法I」を履修した。

春学期入学者（2か国・地域 2大学 3人）

	氏名	性別	大学名／国・地域	在籍校での専攻	在学期間
1	Ms. Shaakira Jassat	女	Design Academy Eindhoven (NETHERLAND)	Food Non Food	半年
2	Ms. Lotte Johanna Hedwig Schlor	女	Burg Giebichenstein University of Art and Design Halle (GERMANY)	Ceramics / Glass Design	半年
3	Ms. Lene Zech	女		Industrial Design	半年

平成30年度春学期時間割

	月	火	水	木	金
I			(自主研究D)		(自主研究D)
II		「自主研究D」 全体ミーティング	(自主研究D)	SPACE-ARITA 日本事情研修F	(自主研究D)
III	ロクロ成形I 石膏型成型I	装飾技法I	(自主研究D)		(自主研究D)
IV	ロクロ成形I 石膏型成型I	装飾技法I	(自主研究D)		(自主研究D)
V			(自主研究D)		(自主研究D)

■「パネルプレゼンテーション」

5月23日（水）15:00～16:30、A101教室にて開催。SPACE-ARITA 学生3名の発表の後、学生・教員交えたディスカッションが行われた。終了後は有田セラミック専攻学生主催の歓迎会も行われ、さらに交流を深める場となった。



■ 「自主研究D」

1	Ms. Shaakira Jassat	<p>「Local is Lekker」 彼女自身の出自、生き立ちや宗教的な観点から日本の食文化や慣習への類似点を見つけた。最終的に日本に関心を寄せる外国人が、その国（地域）の食文化を受け入れやすくするために、特に日本食の「盛付け」に着目し、融合させたプレートを作成した。</p>	
2	Ms. Lotte Johanna Hedwig Schlor	<p>「Fitted Space」 日本の社会や文化の中で様々な考慮しデザインされた日本製品、例えば多機能、コンパクト、省スペース、便利な製品などに驚き感心した。そのアイデアを作品に活かし、蓋付きのDONBURIの大小を提案した。身と蓋は上下どちらにも使用でき、またサイドがカットされた形状と入れ子状になることで、省スペース化を図った。</p>	
3	Ms. Lene Zech	<p>「mornings in japan」 「茶の湯」の哲学と精神に興味を持ち、同時に日本で様々な考慮された製品に着目した。これらの観点に基づいて、カップの中に擦り器が施された、使用者自身でフレーバーを楽しむ、ヨーロッパ文化のためのティーセットを制作した。</p>	



■ 「日本事情研修F」

オリエンテーションで学生に配布する、春学期の見学等を記した予定表は以下の表の通りである。

日本事情研修予定表：The schedule of “Field work on Japanese affairs” 2018

	日	時限	内容
1	12-Apr Thu	II 10:00～12:00	オリエンテーション・泉山陶土採掘場、有田歴史民俗博物館見学 Introduction, to visit Izumiyama Quarry and Arita Fork & History Museum
2	20-Apr Fri	II 10:00～11:30	九州陶磁文化館見学 to visit Kyushu Ceramic Museum
3	26-Apr Thu	I～IV 9:00～9:45 10:00～11:10 11:20～12:00 13:00～14:00 14:20～15:20 15:40～16:30	肥前地区の焼物産業について学ぶー有田・波佐見 vol.1 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.1 (1 day field work in Arita) 田島商店：Tajima clay factory 福稔生地：Fukutoshi raw products making factory 田川石膏：Tagawa model&mold making factory 柿右衛門窯：Kakiemon (traditional pottery, national treasure 14th Kakiemon) 錦右エ門陶苑：Kin'emon-touen (pottery) キハラ・アリタセラ他：Kihara wholesale company, Arita Cera
4	17-May Thu	III～V 13:00～14:00 14:20～15:00 15:15～16:20 16:30～17:00	肥前地区の焼物産業について学ぶー有田・波佐見 vol.2 (フィールドワーク (学外見学半日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.2 (0.5 day field work in Hasami) 香蘭社：Kouransha (porcelain manufacturer) 松永鑄込：Matsunaga raw products casting factory 白山陶器：Hakusan Porcelain (porcelain manufacturer) 焼物公園・西の原南倉庫： Open Air Museum of Kilns in Hasami, the shopping place of porcelain
5	14-Jun Thu	I～V 9:00～10:30 11:30～12:00 13:30～14:30 15:00～16:00 16:30～17:00	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 伊万里・唐津周辺 vol.3 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.3 (1 day field work to Imari and Karatsu) 畑萬陶苑・大川内山見学 ：Hataman-touen (pottery), to see around the porcelain field of Nabeshima domain “Imari Ohkawachi-yama” 作礼窯：Sakurei-kama (pottery) 太郎衛門窯：Tarouemon-kama (traditional pottery) 唐津城：Karatsu-jo (the important castle of porcelain of Karatsu domain in Edo period) 一番館：Ichibankan (the shop of porcelain)
6	12-Jul Thu	II 10:00～11:30	プレゼンテーション・ブックレット提出 Short presentation with Booklet



1.3 平成30年度日本語・日本文化研修コース

■コース概要

本学の日本語・日本文化研修コースは、研修生が自らの日本語能力を伸ばすだけでなく、日本人学生と共修することによって、広く日本文化や地域のことを学べるコースとなっている。具体的には、全学教育機構が提供する「外国人留学生プログラムのための日本語科目」や日本人学生との共修科目である「インターフェース」、また自分の興味に応じた授業を、佐賀大学の各学部提供科目のなかから選んで履修することができる。これは平成25年度の改革によるもので、これにより、幅広い専門をもった学生が、自分の興味関心に応じた科目を履修することができるようになった。

下記の単位を修得すると、修了時に、佐賀大学から修了証が授与される。

区 分		授業科目名	単位数	修了要件
教養教育科目	外国人留学生プログラムのための授業科目			選択必修 2単位以上修得すること
	インターフェース科目			選択必修 2単位以上修得すること
学部間共通 教育科目	留学生プログラム教 育科目	日本事情研修A	2	選択必修 2単位以上修得すること
		日本事情研修C	2	
		日本事情研修B	2	
		日本事情研修D	2	
全学教育機構が開設する授業科目				選択必修 10単位以上修得すること
各学部が開設する授業科目				
計				18単位以上

■コーディネーター

布尾 勝一郎 准教授（国際交流推進センター） 吉川 達 講師（国際交流推進センター）

■開講期間

平成29年10月～平成31年 8 月

■実施概要

平成30年度は、29年度後期から在籍していたヴィタウタスマグヌス大学（リトアニア）の研修生が佐賀大学で学んだ。受け入れ学部は教育学部である。日本語科目や日本事情研修に積極的に参加し、無事に修了した。加えて、日本人と留学生のコミュニケーションに関する調査を行い、レポートを作成した。

平成30年度後期からは、前年度同様、ヴィタウタスマグヌス大学（リトアニア）からの日研生を1名、教育学部で受け入れた。現在は、日本語の能力を伸ばしつつ、日本人学生との共修授業に参加したり、書道のサークルに参加するなど、積極的に活動し、日本社会への理解を深めている。

平成29年度日本語・日本文化研修コース受講生（平成29年10月～平成30年 8 月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
リトアニア	女	教育学部	ヴィタウタスマグヌス大学	大学

平成30年度日本語・日本文化研修コース受講生（平成30年10月～平成31年 8 月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
リトアニア	女	教育学部	ヴィタウタスマグヌス大学	大学

1.4 平成30年度日本語研修コース

【開講期間】平成30年 4 月 9 日～8 月 6 日（前学期）、10 月 1 日～2 月13日（後学期）

【コーディネーター】吉川 達 講師（国際交流推進センター）

【概 要】

日本語研修コース対象の学生のために、大学院入学前予備教育としての日本語科目を提供している。対象は主に国費外国人留学生であるが、私費留学生についても受講を認めている。日本語初級前半・初級後半・初中級までの3レベルを想定し、受講学生は学期開始時のプレースメント・テストによってレベル判定が行われる。各レベルで実施される日本語授業は以下の通り。

初級前半レベル（8 コマ）

- ・日本語文法初級 I 3 コマ
 - ・日本語会話初級 I 2 コマ
 - ・日本語漢字語彙初級 I 1 コマ
 - ・生活基礎日本語 1 コマ
- （集中）



やきもの公園（波佐見町）

・日本語演習 (A)／(C) 1 コマ

初級後半レベル (8 コマ)

・日本語文法初級Ⅱ 3 コマ

・日本語会話初級Ⅱ 2 コマ

・日本語漢字語彙初級Ⅱ 1 コマ

・日本語演習 (A)／(C) 1 コマ

・日本語演習 (B)／(D) 1 コマ

中級前半レベル (9 コマ)

・日本語文法中級Ⅰ 2 コマ

・日本語会話中級Ⅰ 2 コマ

・日本語漢字語彙中級Ⅰ 1 コマ

・日本語読解作文中級Ⅰ 1 コマ

・日本語聴解中級 (A)／(B) 1 コマ

・日本語演習 (A)／(C) 1 コマ

・日本語演習 (B)／(D) 1 コマ

1.5 Saga University Summer Program (SUSP) 2018

【実施期間】 平成30年7月3日～7月17日 (15日間)

【参加学生の所属大学】 パシフィック大学 (米国)、バイオ産業大学 (フランス)、ユバスキュラ大学 (フィンランド)、ラトロブ大学 (オーストラリア)、佐賀大学

【担当教員】 山田 直子 准教授 (国際交流推進センター) 布尾 勝一郎 准教授 (国際交流推進センター)

【概要】

海外協定校より10名を迎え2週間のサマープログラムを実施した。今年度は「持続可能な社会」をテーマとし、本学学生11名と共に家族とコミュニティ、自然環境、伝統文化の持続可能性について、専門家や、生産者、市民団体関係者などとの交流を通して学習した。加えて、本プログラムの学生のみを対象とした日本語授業を7回行い、街を歩く、外食をするなど、滞在中に使用する日本語会話を中心に学んだ。また日本語授業には日本人学生のボランティアも参加し、多くの交流の機会を得た。

本プログラムに参加する佐賀大学生は、協定校の学生に日本の歴史や文化について体験的に学んでもらうため、複数のワークショップを自ら企画した。広島・長崎の原爆に関するワークショップでは、原爆投下に関する日米の解釈や学校教育での歴史教育の違いなどを率直に意見交換し、平和な社会を築く上で重要な事柄や課題について国籍や歴史観の違いを超えて共に考えた。

プログラム終盤では、「持続可能な社会」に関連するフィールドワークを日本人学生と留学生の混合チームで行なった。大型商業施設でのインタビューや探しのゴミ処理場の見学など、自ら方法を検討して実施した。その結果は最終日の成果報告会にてグループで発表した。前年度に続き、佐賀大学生は教養教育科目の「グローバルリーダーシップ (集中講義)」として履修し、2単位が付与された。今年度は台風により週末に計画していた宿泊研修の実施が中止となった。加えて天候に影響で複数の活動の取りやめや、代替活動の提供など柔軟な対応が必要であった。

【プログラムスケジュール】

Saga University Summer Proragm 2018

		July 2 (Mon)	July 3 (Tue)	July 4 (Wed)	July 5 (Thu)	July 6 (Fri)	July 7 (Sat)	July 8 (Sun)
WEEK 1	AM	Arrival and Checking-in	10:30 – OPENING CEREMONY & ORIENTATION	にほんご JLC- 1 8:50 – 10:20 10:30 – 12:00	にほんご JLC- 2 8:50 – 10:20 10:30 – 12:00	にほんご JLC- 3 8:50 – 10:20 10:30 – 12:00	SUSTAINABILITY (Karatsu city)	SUSTAINABILITY (Karatsu city)
	Lunch Time		12:00 – 13:00 Welcome Lunch		Meet in front of Univ. Library at 12:50		10:00 Visit Terraced paddy field	9:30 Depart from Hostel
	PM		13:00 – 14:00 CAMPUS TOUR	13:00 – 14:30 【WORKSHOP】 Sustainability in Family and Community	13:00 – 14:20 【VISIT】 Reserch Cetner for Algae Industry, Saga	13:00 – 14:20 PREPARATION FOR HIGH SCHOOL ACTIVITY	12:00 Arrive at Hadomisaki Hostel for Youth	10:00 – Lecture
			Free	14:40 – 16:10 【WORKSHOP】 Exploring Japan (1) Rent a bike	14:40 – 15:10 【WORKSHOP】 Presentation by Saga Students	14:40 – 16:10 PRESENTATION AND DISCUSSION	14:00 Orientation 15:00 Group work 17:00 Outdoor Cooking	11:00 – 13:00 Volunteering for presevation and Lunch 13:00 – 15:00 Karatsu Castle 15:00 Depart from Karatsu
WEEK 2	AM	にほんご JLC- 4 10:30 – 12:00	【VISIT】 (Kashima city)	にほんご JLC- 5 8:50 – 10:20 10:30 – 12:00	にほんご JLC- 6 8:50 – 10:20 10:30 – 12:00	にほんご JLC- 7 8:50 – 10:20 10:30 – 12:00	10:00 – FIELDWORK ON SUSTAINABILITY	Free
	Lunch Time	12:30 – 14:00 【WORKSHOP】 Exploring Japan (2)	11:00 Creature in Tideland and Ramsar convention	Meet in front of Univ. Library at 12:15	Free	Free		
	PM	14:40 – 16:10 【WORKSHOP】	13:00 Mini Gatalympic 15:30 Yutoku Inari Shrine	13:30 – 【VISIT】 Takeo High School	14:40 – 16:10 【VISIT】 Exploring Japan (3) History of Saga	14:40 – 16:10 【WORKSHOP】 Exploring Japan (4) SAGA-NISHIKI Experience	PREPARATION FOR GROUP PRESENTATION	
WEEK 3	AM	July 16 (Mon)	July 17 (Tue)	July 18 (Wed)				
	Lunch Time	Free	Return your bike	Checking-out and departure				
	PM		12:00 – Group Presentation and Discussion 13:00 – 14:30 Closing Ceremony					



藻類研究センター



おにぎり作り体験



組みひも体験



組みひも体験



武雄高校訪問



佐賀錦体験



佐賀維新博見学



有田町視察



最終日プレゼンテーション

1.6 香港中文大学サマープログラム

【実施期間】平成30年7月4日～7月13日（10日間）

【参加学生】香港中文大学生10名、佐賀大学生10名

【担当教員】吉川 達 講師（国際交流推進センター）、山田 直子 准教授（同）

【概要】

同年2月に実施された香港への派遣プログラムで交流した香港中文大学生を佐賀で受け入れ、サマープログラムを実施した。同時期に SUSP が実施されているため、一部 SUSP と合同で活動を行った。

プログラム内容としては、佐賀大学生との交流、佐賀の伝統文化施設、史跡等の見学、佐賀大学の授業参加、自主課題調査、合宿、高校訪問を予定していた。

交流する佐賀大学生は、同年2月に香港を訪問し、今回受け入れた香港の学生達と交流した学生である。久しぶりの再会を喜ぶとともに、佐賀大学生たちは自分たちがホストの役割となることに、責任を感じていた。

香港中文大学生は佐賀大学生の助けを借り、自分たちの設定した自主課題調査のテーマについて調査し、プログラムの最後に「応用言語学」の授業で日本人学生を前に成果を発表した。自主課題のテーマは「香港と佐賀から見た都市計画」「佐賀県と明治維新～肥前藩が日本現代化における重要性」「佐賀と香港の主な交通手段の比較」「佐賀と香港の食文化の比較」「文学から見た日本歴史・第二次世界大戦の佐賀と香港」であった。

高校訪問では、武雄高校を訪れ、交流活動を行った。武雄高校の1年生と2年生の英語の授業に参加し、ゲームや香港紹介、世界各国の伝統的な遊びを行った。また放課後の部活動を見学し、日本の高校文化を体験した。交流した高校生は恥ずかしがりながら話しかける生徒が多かったが、留学生がリードして会話を進める場面も多く見られた。交流言語は英語であった。

プログラムの内容は基本的に前年度を踏襲したものであったが、前年度は SUSP 実施時期が重複しなかったため、本プログラム単独での実施であったが、今回は鹿島見学など、SUSP 合同で行う活動もあり、日本人だけでなく、他国の留学生との交流もあった。

なお、本年度はプログラム期間中に特別警報が発令された影響で合宿が実施できなかった。代替処置として、吉野ヶ里歴史公園を見学したが、合宿を楽しみにしていた香港中文大学生も多くいたようで、合宿中止は残念な点であった。



歓迎会の様子

1.7 留学生交流支援事業

1.7.1 短期留学生受入れ支援事業

(1) 平成30年度佐賀大学短期留学生受入れ支援事業（申請5件中3件採択）

No.	プログラム名	申請者	申請者 所属・職	受入学生交流大学・機関名 (出身国)	支援 人数	対象学生	研修期間	助成額
1	環アジア国際セミナー・建築都市デザイン国際ワークショッププログラム	三島 伸雄	理工学部・教授	韓国交通大学（韓国）、タマサート大学（タイ）、チェンマイ大学（タイ）、カザフ建築土木アカデミー（カザフスタン）、アイントホーフエン工科大学（オランダ）、ウィーン工科大学（オーストリア）、タンリン工科大学（ミャンマー）	10	建築学部 建築学科他	9日間	593,491円
2	高電圧・電力機器に関する国際パートナーシップ教育プログラム	村松 和弘	理工学部・教授	武漢大学・電気工程学院（中国）	6	博士・修士課程の全学年	6日間	410,075円
3	日米学生が協働で学ぶ、佐賀の伝統美と平和教育	江口 誠	全学教育機構・准教授	スリッパリーロック大学（アメリカ）	10	全学部・全学年	10日間	700,000円
合計					26			1,703,566円

【採択プログラムの成果報告】

1. 三島 伸雄 教授（理工学部）環アジア国際セミナー・建築都市デザイン国際ワークショッププログラム

地域の歴史的環境の保全・再生に代表される文化多様性を学ぶ場として、佐賀県鹿島市肥前浜宿を対象地として、参加学生に歴史的環境を継承しながら地域を再生する計画・デザインの提案に取り組みました。それを通して、建築・都市デザインにおける可能性と意義を学び、多様な国籍の学生間で共有することができました。国際性豊かな感覚を有し、異なる多様な文化を受け止め、地域の特質を理解し、多様な国籍の学生と議論し、デザイン性豊かな提案ができるような建築・都市デザイン分野の学生を輩出するという目標に対して、少なくとも、佐賀大学の学生は触発され、英語での成果物を作成した。そして、その作業を通じて、英語での議論に積極的に取り組むようになったと自己評価できる。佐賀県の町並みとして、肥前浜宿だけでなく、祐徳神社門前町ともつないだ取り組みを行うことができた。2つの町並みの住民の協力を得て実施することができた。祐徳神社門前町では、シンポジウムを行った。今回は、アイントホーフエン工科大学から初めて参加があった。西洋人も多くいたために、交流が多様化して非常によかった。一方で、多様な大学との連絡調整、単位の調整などが大変であった。特に、カザフスタンおよびウィーン工科大学学生の数名については Visa の取得が必要であった。今後の継続にあたっては、予算確保が重要である。また、今年は特に暑かったので、体調管理に十分に配慮する必要がある。

2. 村松 和弘 教授（理工学部）高電圧・電力機器に関する国際パートナーシップ教育

武漢大学 CHEN 教授、YUAN 教授が、それぞれ「可変リアクトル」、「故障電流限流器」、佐賀大学猪原准教授、村松が、それぞれ、「パルスパワー」、「磁性材料」の基本原理と応用について講義を行ない、本プログラムを実施する上で必要な電力制御装置の基礎技術を身に付けた。また、武漢大学・佐賀大学の参加した大学院生全員が、各自の研究テーマについて発表を行い、佐賀大学の留学生も含めた全員で議論することにより、国、専門

分野を超えた議論ができた。

今回、本プログラムとは専門分野が異なる学生も参加したため、当初、教員による講義や学生の研究に対する議論が十分に行われないことを危惧していたが、武漢大学教員による講義に対して、参加学生は、研究にはアイデアの創出が重要であることを認識し、また、学生の全ての研究発表に関して質疑が行われ、有意義なプログラムとなり、参加者の専門分野が異なってもプログラムが成立することが分かった。本プログラムで研究

発表・議論した内容に関して、平成30年度は、武漢大学と共著の学術研究論文が米国電気電子学会誌 (IEEE) に5件掲載され、平成30年10月に中国で開催された国際会議 (IEEE CEFC 2018) で、武漢大学と共同で9件発表した。また、令和元年7月に仏国で開催される国際会議 (COMPUMAG 2019) で、武漢大学と共同で5件発表した。

3. 江口 誠 准教授 (全学教育機構) 日米学生が協働で学ぶ佐賀の文化と平和教育

「佐賀と日本の伝統を直に体験して学び、佐賀及び日本の伝統美への理解を深めることで、学生 (カンバセーションパートナー) やホストファミリーとの間で異文化理解を深める」という目標は十分に達成出来たと考える。また、「この短期プログラムに参加したアメリカ人学生を1人でも多く佐賀大学への長期留学に導く」という目標についても、既に参加学生の中から農学部のプログラムへの入学の問い合わせを行っている者もおり、十分に達成出来ると考えている。特筆すべき成果としては、今回は24名というかなり多くの学生が本プログラムに参加したにもかかわらず、ホームステイを希望する学生全てに滞在先を確保することができ、学生の異文化体験を実現出来たという点にある。また、実技を伴った日本文化の体験や、佐賀県内の小、中、高、大学を訪問、長崎や有田の訪問など、地方であっても魅力のあるプログラムを提供することが出来たと自負しており、参加学生の満足度も高かった。

さらに、これまでスリッパリーロック大学に短期留学した学生を中心に全ての米国人学生にカンバセーションパートナーを割り当てたことで、授業時間外でも密度の濃い異文化交流が行えたと考える。

1.7.2 特別聴講生・特別研究学生等 学習奨励費支援事業

(2) 平成30年度佐賀大学特別聴講学生・特別研究学生等学習奨励費支援事業 (採択3件)

No	申請者	プログラム名	国名	出身大学	支給期間
1	Sittichoke Ketkaeo	特別研究学生	タイ	カセサート大学	1年間
2	Korsakaite Ruta	特別研究学生	リトアニア	ヴィタウタスマグヌス大学	1学期間
3	Luxford Luke Nicholas	SPACE-E	オーストラリア	ラトロープ大学	1学期間

2. 学生の海外派遣

2.1 本学学生の海外派遣概況

本年度の海外協定校等への学生派遣総数は256名であった。国際交流推進センターが設置された平成23年以降、派遣人数が急増したが、過去3年間は横ばい傾向にある。平成29年度の261名から5名減となった。派遣プログラム別の派遣数は以下の表に示す通りである。全派遣数に占める3ヶ月未満の留学は1割を切っており、短期留学に比べ長期留学の志向が弱いことが理解できる。

センター発足時より、長期留学への誘いとして学部1～2年生を対象としたプログラムの拡充を行ってきた

が、短期のプログラムを複数回参加するリピーターは増加するものの、短期のプログラムを経て長期留学にステップアップする学生は各短期プログラムに1名～2名程度に留まっている。プログラムの成果を数量的な方法でのみ評価すべきではないが、長期留学への動機付けを一つの目的として実施してきた点を考えると、短期留学への参加だけでは長期留学への後押しにならないことがわかる。

また長期留学の推進として経済的支援を行うための財源を過去6年間確保してきた。そのため、ほぼ全員が何らか

の奨学金を受給している。しかし経済的問題が解決されても、インターンシップや教育実習の時期、就職活動の「遅れ」、単位互換の難しさによる留年など様々な不安材料が学生を消極的にさせている。一般的な傾向として、留学を実現するために必要な情報、とりわけ単位互換の手続きや就職活動とのタイミング、留年が不可避か否かなどについて、自らアクションを起こし、多様なチャンネルから情報収拾をする学生が少なくなっていると感じられる。そのため憶測で判断し気づいた時には留学の時期を逸してしまうという学生も少なくない。

この状況を改善するために、「佐賀大学生のための留学・国際交流ガイドブック」の発行を再開した。平成31年度4月入学者すべてに配布することにした。情報提供については、国際交流推進センターが把握していない各学部におけるカリキュラム編成や実習時期との兼ね合いなど所属学生全員に情報提供をすることが効果的であると考え。大学全体で学生の長期留学を推奨する活動を各学部と連携して展開することが何よりも重要ではないかと思う。

2.2 交換留学生の派遣

平成30年度はアメリカ、カナダ、ドイツ、リトアニア、フィンランド、中国、韓国、台湾、タイの9カ国・地域に20名を派遣した。本年度は修士課程の大学院生による研究を目的とした交換留学に理工学研究科と農学研究科から4名派遣したことが特筆すべき点である。いずれも派遣先大学の研究室に半年間在籍し、多様な国籍からなるラボメイトと協力して研究活動に従事した。もう1つの特徴はヨーロッパへの留学希望者の増加である。20名中8名がヨーロッパの協定校に留学をした。特に、フィンランドのユバスキュラ大学には4名の学部生がTOEFL ITP520点 (IELTS5.5) を満たして留学を実現した。これらの学生は北欧の教育や福祉、多文化社会等に関心を持つ教育学部や経済学部の学生である。さらに一つの転換として指摘できるのが、理系学生の交換留学が多数を占めるようになったことである。上述の理系院生に加えて、理工学部・農学部の学部生が全体の約半数を占めた。20名全てがトビタテ留学 JAPAN (全国版・地域人材コース)、JASSO 海外留学支援制度、本学独自の奨学金、校友会奨学金のいずれかの支援を受け、奨学金受給率100%となった。

	留学の種類	派遣人数
①	派遣交換留学 (トビタテとの重複2名はトビタテで計上)	18
②	トビタテ-全国版	3
③	トビタテ-佐賀地域人材コース	1
④	短期留学 (国際交流推進センター)	100
⑤	短期留学 (学部・研究科)	122
⑥	短期留学 (協定校サマープログラム等)	12
	計	256

■平成24年～30年の交換留学派遣実績

派遣先大学	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	過去7年間の累計
スリッパリーロック大学 (米国)	2	2	2	2	3	1	2	14
バシフィック大学 (米国)	1	2	1	1	1	1	0	7
ウィルフリッドロリエ大学 (カナダ)	0	2	1	0	0	0	1	4
マニトバ大学 (カナダ)	0	0	0	0	1			1
イーストアングリア大学 (イギリス)	0	0	0	0	1	0	0	1
オルレアン大学 (フランス)	2	1	0	1	0	2	0	6
ブルゴーニュ大学 (フランス)	1	1	1	1	0	0	0	4
ドレスデン工科大学 (ドイツ)	0	0	0	0	2	1	2	5
ヴィタウタスマグヌス大学 (リトアニア)		1	1	1	2	2	1	8
ユバスキュラ大学 (フィンランド)		1	1	1	1	3	4	11
ハレ芸術デザイン大学 (ドイツ)						0	1	1
北京工業大学 (中国)	4	2	0	0	6	1	3	16
浙江理工大学 (中国)	0	1	1	3	0	0	0	5
華東師範大学 (中国)	1	0	0	0	0	1	1	3
浙江科技学院 (中国)	0	0	0	0	0	1	0	1
国民大学校 (韓国)	2	2	1	4	4	0	2	15
大邱大学校 (韓国)	0	0	1	0	1	0	1	3
培材大学校 (韓国)	0	0	0	0	1	0	0	1
釜山大学校 (韓国)	1	0	0	0	0	0	0	1
釜慶大学校 (韓国)	0	1	0	0	0	0	0	1
全南大学校 (韓国)	2	0	0	0	1	0	0	3
釜山大学校 (韓国)	0	0	0	0	0	1	0	1
国立政治大学 (台湾)	0	2	2	2	1	1	0	8
国立中興大学 (台湾)	0	0	0	1	0	1	0	2
国立東華大学 (台湾)	0	0	0	0	0	1	0	1
国立台北大学 (台湾)	0	0	0	0	0	0	1	1
ハノイ国家大学外国語大学 (ベトナム)	1	0	0	0	0	0	0	1
タマサート大学 (タイ)	0	0	1	2	0	0	0	3
カセサート大学 (タイ)	0	0	1	0	0	2	0	3
チェンマイ大学 (タイ)	0	1	0	0	0	0	1	2
ペラデニア大学 (スリランカ)	2	1	1	0	0	1	0	5
ラトロープ大学 (オーストラリア)	0	1	0	1	0	1	0	3
シドニー工科大学 (オーストラリア)	2	2	1	2	1	0	0	8
計	21	23	16	22	26	21	20	149

より多くの学生が交換留学を実現させるために必要な支援として、留学希望者の語学力強化がある。欧米の協定校に留学するためには、学生に認知されている TOEIC ではなく TOEFL ITP や IELTS 等の学術英語の運用能力を測るテストを受験しなければならず、多くの学生がスコアアップのための学習方法、モチベーション維持に苦勞しており、協定校の求める語学スコアを満たすことが困難な状況である。それは高校時代に英語が得意であった学生についても同様である。希望する学生全てが、協定校の求める基準をクリアできるよう、次年度につ

いては語学学習強化とコーチングに力を入れて取り組みたい。

交換留学制度の中に、平成25年度に開始した「アジアで活躍できるリーダー養成プログラム」がある。このプログラムはアジアの専門の授業履修や語学学習に加え、派遣先国の視点からその国の制度や習慣、人々の行動様式などを理解するための研究や課外活動を組み込んでいる。本プログラムは開始から5年が経過し、参加した学生数は50名に達した。現地での学習や活動が帰国後の学生生活において、さらには卒業後のキャリアにどのような影響を与えたのかについての検証を今後実施したい。交換留学を希望する学生が、留学への意欲を持続させ、家族や指導教員、部活の友人など周囲の人間を説得したり、語学の条件満たすなど、ハードルを一つ一つクリアし、留学を実現させるためには、入学後のなるべく早い時期に学内外のプログラムを通して異文化や海外へ関心を高め、語学の学習や大学選びなど留学準備を早期に始められるか否かが鍵である。大学は留学情報の効果的な発信、留学先の多様化、短期プログラムや共修授業の参加による動機づけ、経済的支援、学生コミュニティづくりなど包括的な支援を行うことが重要であると思われる。

■平成30年度に本学から派遣された交換学生（9カ国・地域 11大学 18人）

派遣国	派遣先大学名	所属	派遣時の学年	派遣期間	奨励金
アメリカ	スリッパリーロック大学	教育学部	2	平成30年8月～令和元年5月	佐賀大学奨励金
	スリッパリーロック大学	理工学部	3	平成30年8月～令和元年5月	佐賀大学奨励金
ドイツ	ドレスデン工科大学	工学系研究科	1	平成30年9月～平成31年2月	Erasmus +
フィンランド	ユバスキュラ大学	教育学部	3	平成30年8月～令和元年6月	校友会
		教育学部	3	平成30年8月～令和元年6月	校友会
		農学部	3	平成30年9月～平成30年12月	校友会
		経済学部	2	平成30年8月～平成30年12月	佐賀大学奨励金
リトアニア	ヴァイタウタス・マグヌス大学	理工学部	3	平成31年2月～令和2年1月	佐賀大学奨励金
カナダ	ウィルフリッドロリエ大学	農学研究科	1	平成30年8月～平成30年12月	校友会
中国	北京工業大学	経済学部	2	平成31年2月～令和2年1月	JASSO
		農学部	3	平成31年2月～令和2年1月	JASSO
		工学系研究科	1	平成31年2月～令和2年1月	佐賀大学奨励金
	華東師範大学	経済学部	3	平成31年2月～令和2年1月	佐賀大学奨励金
韓国	大邱大学校	農学部	1	平成30年8月～平成30年12月	JASSO
	国民大学校	文化教育学部	4	平成30年9月～令和元年6月	JASSO
		芸術地域デザイン学部	2	平成30年9月～令和元年6月	JASSO
タイ	チェンマイ大学	理工学部	3	平成30年8月～令和元年5月	JASSO
台湾	国立台北大学	教育学部	3	平成31年2月～令和2年1月	JASSO

佐賀大学奨励費：佐賀大学学生海外派遣奨励金（1年間30万円、1月期間15万円（一時金））

校友会：佐賀大学校友会学生派遣奨励金（1年間30万円、1学期間15万円（一時金））

JASSO：JASSO 海外留学支援制度（韓国・タイ7万円、中国・台湾6万円、（月額））

Erasmus +：EU（800ユーロ（月額）・1,000ユーロ（渡航費））

2.3 トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣

「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」は平成26年度に開始した官民協働で取り組む海外留学支援制度で、希望学生は大学を通じて申請を行う。海外協定校が提供する教育プログラムに参加する交換留学とは異なり、留学先は大学に限定されず、また現地での学習や実践活動を自ら計画しなければならない。独創的な留学計画を立てられるが、アイデアを計画書という形にする作業に苦勞する学生多い。自主性や積極性だけでなく、インターパーソナルコミュニケーションや問題解決能力などが計画書作成時にすでに求められている。

本学では、第1期に3名の学生が採択され、インド・ケニア、インドネシア、ミャンマーへの留学を実現させた。平成30年度は9件の応募に対し3件が採用となり、諸外国にてそれぞれの目的に応じた実践的な学修活動に従事した。

■平成30年度の派遣留学生（計3件）

留学期間	学部・研究科	学年	派遣先国	コース	留学計画のタイトル
2018. 9～2018. 10	理工学部	4	フランス	理系、複合・融合系人材	光で駆動する超分子ポリマーの開発を目指して
2018. 5～2018. 12	農学部	3	カメルーン	理系、複合・融合系人材	いざ！未踏の地アフリカのカメルーンへ！！ カメルーンと自分のために尽くす半年間
2018. 9～2019. 1	工学系研究科	1	ドイツ	理系、複合・融合系人材	有機・無機層状ペロブスカイト化合物薄膜の物性値測定

※所属・学年は採用時点

2.4 Saga University Study Abroad Program (SUSAP)

SUSAP 佐賀大学短期海外研修プログラムは、平成25年年度より本格的な実施を開始した全学の学生を対象とする短期の留学プログラムである。本プログラムは、外国語の運用能力を高めるだけでなく、海外協定校等での講義や現地学生・海外からの留学生との共同活動や意見交換、一般市民との交流を通して、現地の社会や文化、生活習慣を学び、多様な文化や価値観を理解するとともに、国際的な視野を育むことを目指している。平成30年度に実施したプログラムは以下の表の通り、11プログラムを実施し、8カ国・地域11大学に100名を派遣した。

本年度は参加学生を選考する際の語学基準について検討を行った。これまで門戸を広く開け、意欲があり、留学の目的が明確である学生に多く参加してもらいたいという願いから、高度な語学力が必要となるプログラムを除いて語学基準を設定せず、派遣が決まった後に派遣先国や留学中の活動に応じた語学学習の準備を事前学習の一環として実施した。

一方で、本学が実施する TOEIC IP の平均点程度以上の英語力を学内選考時に備えておくべきという考え方もあり、さらに別の観点からは、短期留学であっても参加希望者は語学学習にしっかり取り組んでおくべきという考え方がある。そこで春期実施プログラムより、基本的に TOEIC IP400点以上を取得していることとし、英語による授業履修や現地学生とのディスカッション等が主となるプログラムは TOEIC IP の基準を500から580点以上とした。

■平成30年度実施のプログラム

SUSAP 2018 Summer	国・地域	期間	人数	単位付与	語学条件 (TOEIC IP)
大邱大学校プログラム	韓国	3週間	10	あり	不問
釜慶大学校プログラム	韓国	10日間	10	なし	不問
浙江科技学院プログラム	中国	2週間	10	あり	不問
ラトロープ大学プログラム	オーストラリア	5週間	7	なし	550以上(奨学金受給条件)
UM iCamp マラン大学プログラム	インドネシア	2週間	7	なし	不問
計			44		
SUSAP 2019 Spring	国・地域	期間	人数	単位付与	語学条件 (TOEIC IP)
東華大学プログラム	台湾	1ヶ月	17	あり	430以上、英語で専門を学ぶ場合は580以上
香港中文大学学生交流プログラム	中国(香港)	10日間	10	あり	400以上
浙江理工大学プログラム	中国	1ヶ月	6	あり	400以上、又はHSK1級以上
マラン大学プログラム	インドネシア	2週間	6	あり	400以上
パシフィック大学プログラム	アメリカ	2週間	7	なし	580以上
リトアニア・フィンランドプログラム	リトアニア・フィンランド	10日間	10	なし	500以上
計			56		

参加者の傾向を以下に述べる。派遣学生の71%が女子学生で、平成28年度68%、平成29年度69%と、年々女子学生の割合が高くなっている。学年別では、一昨年と同様に学部1～2年生の参加が全体の89%（H27年度75%、H28年度85%、H29年度90%）を占めている。また平成30年度のSUSAP派遣学生100名のうち、令和元年9月現在までに交換留学を開始した学生が5名、学内審査を経て協定校へ推薦中の学生2名、学内審査中の学生が3名となっている。以下に平成29年度に国際交流推進センターが実施した11のプログラムの概要を紹介する。

2.4.1 大邱大学校プログラム (韓国)

■概要

大邱大学校への学生派遣は今年で6回目となった。海外協定校の学生を対象として毎年開催されるサマープログラムで、韓国語の授業と韓国文化体験、大邱近郊へのスタディトリップ等の機会が提供される。留学開始前の事前研修の一環として、7月に大邱大学校国際関係学科からの学生訪問団（学生15名、教員1名）を受け入れた。キャンパスツアーの後、双方の地域や大学の紹介、食事をしながらの交流を行った。大邱大学校での研修は、1日3時間の韓国語授業参加と韓国文化体験、大邱やその近郊の街への視察などが組み込まれている。韓国語の能力別に分けられ、韓国人講師が韓国語のみを使って展開する韓国語講座に対する本学学生の評価は非常に高い。学習意欲を大いに高め、帰国後も独学で韓国語学習に励む学生もいる。本年度の特徴は、半数以上が理系の学生であること、また参加学生が全て女性であったことが指摘できる。近年、若者の韓国文化や韓国語に対する興味関心の強さが、本プログラムに参加する学生の参加の動機にも明確に現れている。現地の若者と積極的に交流し、相手の文化や価値観について、知り、理解することができたのではないかと考える。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成30年8月7日～25日（3週間）

■単位付与 海外交流実習（基本教養科目）2単位

■参加学生 10名

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	2 年	3
経済学部	3 年	1
理工学部	1 年	1
農学部	1 年	3
農学部	2 年	2



2.4.2 釜慶大学校プログラム (韓国)

■概 要

釜慶大学校プログラムが実施するサマープログラムへの派遣で、本年度で2度目の学生派遣となった。本プログラムでは、参加者が「韓国語と韓国文化」と「国際関係」の2つコースのいずれかを選択し受講する。午前は上記コースに参加し、午後は韓国茶道や伝統音楽などのワークショップに参加した。韓国語のコースは上記の大邱大学校プログラムと異なり、レベル分けがなされておらず初心者向けの学習内容であるため、募集要項や学内説明会等で十分な周知が必要であった。結果的に、酷く物足りないと感じた学生はいなかった。本プログラムには日本の他大学からの多くの日本人学生が参加することから、意識的に日々を過ごさなければ、日本語環境に身を置くことになってしまう。一方で、海外渡航が初めての学生にとっては、極度な緊張やカルチャーショックに直面することがなく、良かったと言える。しかしながら、近年、中学校や高校においても海外研修を実施することが増えており、海外渡航、とりわけ韓国への旅行経験のある学生も多くいることから、本プログラムのような負荷のあまり大きくない研修についての再評価が必要であろう。

本プログラムに参加した2名は、釜慶大学によるフルスカラーシップ（プログラム費、寮費の免除）を受給し、7名がJASSO 海外留学支援制度奨学金と1名が佐賀大学助成の支援を受けた。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成30年8月8日～19日（2週間）

■単位付与 なし

■参加学生 6名

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	1 年	1
経済学部	2 年	5
経済学部	3 年	1
農学部	3 年	1
芸術地域デザイン学部	1 年	1
芸術地域デザイン学部	2 年	1



2.4.3 浙江科技学院プログラム (中国)

■概 要

本プログラムは中国の浙江科技学院が毎年実施するサマープログラムで、今回で3回目の派遣となる。浙江科技学院はドイツの大学との間でダブルディグリーなどを含む学術交流を積極的に展開しているため、本サマープログラムの参加者の半数以上はドイツからの短期留学生である。本学学生はこれらのドイツ人学生と共に中国語、中国文化の講義、文化体験や視察など様々な活動に参加した。プログラムは全て英語で行われ、ドイツ人や中国

人バディとのコミュニケーションも英語を使用する。本学学生の多くは、メディアから発信される中国に関する情報をもとに描いていた中国社会像と現地で自分が直接理解した中国社会との間に大きなギャップがあると報告書で述べている。偏見を持つことなく自分が主体的に異文化について学美、自ら考えることの重要性が理解できたようである。日本と比較し、様々な違いや問題はありながらも電子マネーの普及やシェアリングエコノミーが進んでいる現状を目の当たりにしたり、言語は通じなくても助けてくれる市民の方々との出会いや知識やスキルの獲得に貪欲な中国人学生から様々な問いを投げかけられる経験など、事後研修での振り返りや報告書での語りには表出されるように、2週間の活動を通して日本社会や自分自身を客観的に観察し相対化することができたのではないかと考える。事後研修では、新学期へ向けての意欲的な姿勢を見せており、多様な考えや価値観を持つ同世代との密な交流の意義を改めて実感した。

本プログラムに参加した全ての学生が浙江科技学院による授業料免除の支援を受けた。また9名がJASSO 海外留学支援制度奨学金、1名が本学の助成金を受給した。

■**担当教員** 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■**実施期間** 平成30年 8月13日～26日（2週間）

■**単位付与** 海外交流実習（基本教養科目） 2単位

■**参加学生** 10名

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	1年	1
経済学部	3年	1
農学部	2年	1
理工学部	1年	1
芸術地域デザイン学部	1年	5
教育学部	2年	1



2.4.4 ラトロブ大学プログラム（オーストラリア）

■概 要

ラトロブ大学キャンパス内にある語学学校において実施されている英語コースに今年度初めて本学学生7名を派遣した。長期派遣を目指す学生や高度な語学力を身に付けたいと希望する学生を対象として、参加学生を募った。他のプログラムと比べ授業料や渡航費が高額であること、さらに奨学金受給条件がTOEIC580点と高いことから派遣学生数は7名となった。本プログラムでは学生の英語能力に応じて、適切なレベルのクラスに配置され、週20時間の授業に参加する。さらに学生はアカデミックライティング、演劇英語、IELTS 準備講座、仕事の英語など様々なワークショップに参加することができるようになっている。したがって、学生の積極性や意欲次第で1週間の授業時間数を容易に増やすことができる。本プログラムの一つの特徴は、協定校との連携により学生交流の機会を双方の学生に多く提供している点である。ラトロブ大学の日本語教員の協力を得て、日本語の授業に参加している現地学生や、日本クラブのメンバー対象に佐賀大学生のバディ希望者を募っている。本年度は本学学生1名につき2名のバディが配置されるほど、多くの現地学生が関心を持ってくれた。バディの中には日本への留学予定者や既に交換留学から帰国した学生、更には過去佐賀大学のサマープログラムに参加した学生らも含まれた。これにより英語スキルの向上のみならず、多様なバックグラウンドを持つオーストラリア人との交流を通してオーストラリアの多民族社会とその歴史や文化などを学習することができた。

本プログラムの参加者のうち語学基準を満たした学生に対し本学より10万円の奨学金を支給した。

■**担当教員** 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成30年8月22日～9月29日（5週間）

■単位付与 なし

■参加学生 7名

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	2年	2
経済学部	3年	1
理工学部	2年	1
教育学部	1年	1
教育学部	2年	1
農学研究科	修士2年	1



2.4.5 UMiCamp マラン大学プログラム（インドネシア）

■概 要

本プログラムはインドネシアのマラン国立大学が毎年8月に世界各地から学生を招き、実施しているサマープログラムである。プログラムを通してインドネシア社会の多様な側面について理解を深めることが目的である。プログラムは教育活動と社会・文化活動をバランスよく組み込んでいる。市民性の醸成に繋がるような村落コミュニティでのホームステイやボランティア活動などが特色である。本年度の参加学生は、39カ国63名で、アフリカや中東、東南アジアの出身が多かった。また現地のインドネシア人学生のリーダーシップによるプログラムへの貢献が非常に大きく、日本の大学であれば教職員が担当するような役割も効果的に担っていた。これらの学生リーダーは学内で選抜され、十分に研修を受けた後、アクティビティの指導やモデレーターを務めている。本プログラムでは海外からの留学生やインドネシア人学生だけでなく、一般市民との交流機会を提供している。学生は自分と同じ国の出身者以外と2名1組で農家にホームステイした。言葉もうまく通じず、生活習慣が大きく異なる家庭での経験は、本学学生に強烈なカルチャーショックを与えた。続いてUMiCamp終了後は、マラン国立大学理工学部による研修が本学学生のみを対象に3日間実施された。これはマラン国立大学から佐賀大学に派遣される交換留学生が理工学部生だけを対象としており、今後も継続的に学生を派遣したいという意欲・希望の表れであると理解した。本学学生は300名程度の理工学部生を前に佐賀大学や佐賀に関するプレゼンテーションを英語で行い、さらに日本文化の一つとして書道のデモンストレーションとワークショップを行なった。学生は理工学部教員宅に2泊滞在し、農村と都市の暮らしぶりの違いも学ぶことができた。

本プログラムに参加した学生7名のうち、大学院生2名はマラン国立大学より参加費免除の支援を受け、他5名についてはJASSO海外留学支援制度の奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成30年8月22日～9月5日（2週間）

■単位付与 なし

■参加学生 7名

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	1年	1
経済学部	2年	1
理工学部	1年	1
工学系研究科	修士1年	2
農学部	1年	1
農学部	2年	1



2.4.6 香港中文大学学生交流プログラム（香港）

■概要

本プログラムは、本年度で7年目となる。例年通り香港での現地研修の前に4回事前研修を行った。事前研修では、香港の基礎情報の確認、自主課題の設定、スカイプによる香港中文大学生との事前交流、危機管理講習などを行った。参加者の学部は多様で佐賀大学生同士も学部を越える交流となった。

香港での現地研修では、主に、香港中文大学生との交流、香港中文大学の授業参加、自主課題調査、博物館等の見学、日本人墓地清掃、現地で活躍する日本人との意見交換などを行った。現地では、10名の佐賀大学生が10名の香港中文大学生と交流パートナーとなり、活動を行った。自主課題調査は、このパートナーの助けを借りながら進め、最終日に香港中文大学の授業で成果を発表した。

香港中文大学生との交流は、交流パートナーの学生が中心であるが、それ以外にもプログラムの参加者経験者や、授業参加時に交流した学生など多くの香港中文大学生と交流する機会があった。さまざまな活動を通して、交流パートナーはじめ、多くの香港中文大学生と親密な関係を築いた。また、高校訪問があり、現地の高校生と日本語、英語を交えて交流した。香港の高校生のエネルギッシュな態度に佐賀大学生も積極的に応えて、活発な交流となった。

香港の学生との交流だけでなく、現地で活躍する日本人との交流も行った。佐賀大学友好特使の副島善文氏の協力の下、外国人墓地を訪問し、佐賀県出身者の墓を中心に清掃活動を行った。副島氏の講義を聞きながら清掃活動を行うことで、佐賀と香港のつながりを考えるきっかけとなった。墓地清掃には、副島氏の他、香港や海外で活躍する社会人の方も参加し、墓地清掃後には意見交換会を行った。佐大生はほとんどが1年生であるため、まだ今後のキャリア形成を具体的に考えていない学生が多かったが、この意見交換会を志望理由に挙げている学生もあり、佐賀や九州出身の方が海外で活躍されている話を聞いて、刺激を受けていた。

本派遣プログラムは、同年7月に佐賀大学で行われる受け入れプログラムと一体である。香港で交流した香港中文大学生との別れを惜しみつつ7月の再会に期待して香港を発った。

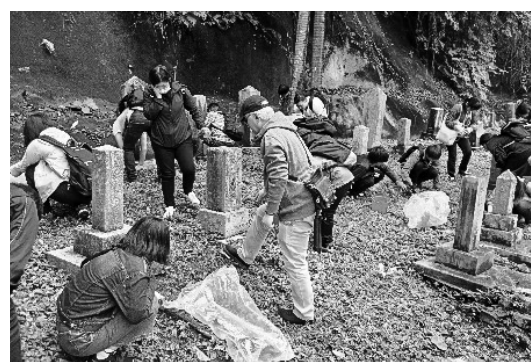
帰国後、1回の事後研修を経て、プログラムは終了となった。

■担当教員 吉川 達 講師（国際交流推進センター）

■実施期間 平成31年2月17日～26日（10日間）

■単位付与 国際交流実習（基本教養科目）2単位

■参加学生 10名



墓地清掃

佐賀大学生参加者

	性別	学部	学年
1	男	農学部	2
2	女	農学部	1
3	女	農学部	1
4	女	教育学部	1
5	女	教育学部	1
6	男	芸術地域デザイン学部	1
7	男	経済学部	1
8	女	経済学部	1
9	女	医学部	1
10	女	医学部	1



授業での交流

2.4.7 浙江理工大学プログラム（中国）

■概要

浙江理工大学への派遣は今年で5度目である。本プログラムは、現地の交換留学生が参加する中国語授業に1ヶ月間参加するもので、学生は中国で中国語を学ぶ楽しさや、自らの著しい中国語能力の伸びを実感している。授業は週5日、午前中に90分の授業を2コマ履修した。本年度は6名全員が初級クラスを受講し、発音や簡体字など基礎的な学習をした。学生によると、佐賀大学で中国語の授業を履修していない学生にとっては、初級であっても発音の違いを理解するのが難しく、習得に時間がかかったが、1ヶ月後には街でも簡単な中国語を聞き取れるようになり、学習の成果を実感したと語っている。本プログラムは、夏に実施される2週間程度のプログラムと異なり、文化体験や視察などの体験学習の機会を提供されないが、現地学生のバディが1名につき2～3名つくため、積極性のある学生はバディと一緒にクラブ活動に参加したり、様々な場所に訪れるなど意見交換をしながら自分自身の活動を組み立てていくことができる。現地バディは日本語学科の学生であるため、日本語が流暢で常に使用言語は日本語であった。一方、中国語クラスには中央アジアやアフリカ、ヨーロッパ出身者など様々な国籍の学生がおり、習ったばかりの中国語表現を使用したり、英語でコミュニケーションをとったりと異文化コミュニケーションの機会が得られた。

本プログラムの参加学生は、浙江理工大学による授業料免除に加え、2名はJASSO 海外留学支援制度奨学金、4名は本学の奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成31年3月2日～30日（1カ月間）

■単位付与 海外交流実習（基本教養科目）2単位

■参加学生 6名

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	1年	4
農学部	1年	1
農学部	2年	1



2.4.8 国立東華大学プログラム（台湾）

■概要

平成27年度に開始した台湾・国立東華大学への1ヶ月間の派遣プログラムは本年度で4回目となり、これまでで最も多い17名を派遣した。本プログラムは教養科目や専門科目の授業を約1ヶ月間履修するもので、半年あるいは1年間の通常の交換留学と同じ経験を得られる。授業時間数は1週間20時間で、自分の関心のある教養科目や各々の専門分野の授業を組み合わせ受講する。出発時の英語能力が十分でない場合は、英語や中国語の語学の授業を中心に受講する。また学生には1人ずつ現地学生バディがつき、1対1の親密な交流も行うことができる。このように各自の授業スケジュールや履修する科目、放課後の過ごし方も自然と異なるため、同じ寮に滞在しても、常に佐賀大学生同士で行動するのではなく、主体的に行動することができる環境であった。本学学生が受講した授業は、概ね20名から40名の規模で、佐賀大学生（16名が1年生）にとっては少人数と感じられたようである。学生が最も驚いたのは、どの授業もディスカッションやプレゼンテーションの機会がたくさんあり、アクティブラーニングが基本であるということである。また1ヶ月間の履修であるにも関わらず、佐賀大学生を特別扱いするのではなく、同じクラスメートとして討論や発表にも参加した。ほとんどの参加学生にとって、本プログラムが初めての留学で、渡航直後は戸惑いが多く、勇気が必要だったが、1ヶ月後には各々が掲げた目標を達成し、人間的にも成長することができたと述べている。

本プログラムの参加者は東華大学より授業料免除を受け、さらに14名がJASSO 海外留学支援制度奨学金、3名が本学の助成金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成31年2月17日～3月16日（1ヶ月間）

■単位付与 海外交流実習（基本教養科目）2単位

■参加学生 17名

学部・研究科	学 年	人 数
経済学部	1年	1
農学部	1年	5
農学部	2年	1
教育学部	1年	7
芸術地域デザイン学部	1年	2
医学部	1年	1



2.4.9 パシフィック大学プログラム（アメリカ）

■概要

本プログラムは、アメリカのパシフィック大学において学術英語のコースに参加するものである。プログラムの目的は、英語圏の留学に必要な高度な英語能力を身につけること、また現地学生や市民との交流を通して、アメリカの学生生活や制度、アメリカ社会や文化について学ぶことである。パシフィック大学の特色ある教育プログラムは「コミュニティエンゲージメント」と呼ばれるサービスラーニングのようなもので、多くの現地学生が参加している。本学学生も期間中に3回、小学校でのボランティア活動など地域社会での活動に参加し、アメリカの大学で積極的に実践されている市民性を涵養する教育を体験することができた。英語の授業はレベル別、技能別に行われており、1週間に約15時間受講した。またコミュニティエンゲージメントは1週間に4時間参加した。他の多くのSUSAPプログラムと同様、本プログラムに参加する学生には1～2名の現地学生がバディとな

る。バディは生活のサポートや交流の場を案内するなど様々な機会を提供してくれた。一方で、課題も明らかとなった。本プログラムに参加する学生は TOEIC IP615点から805点を持っており、中上級から上級レベルの英語能力をすでに備えている。学生らはレベルごとに配置されてはいるものの、クラスメートのほとんどは日本の他大学から留学する日本人学生であった。そのため本学学生にとっては、クラス環境の面で不満が残るものとなってしまった。来年度以降については、派遣学生の英語能力のレベルや海外経験の有無なども含め、対象学生について再検討したい。

参加学生全てが佐賀大学からの奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成31年2月15日～3月3日（2週間）

■単位付与 なし

■参加学生 7名

学部・研究科	学 年	人 数
教育学部	2年	1
理工学部	1年	1
理工学部	3年	1
理工学部	4年	1
医学部	2年	1
農学部	1年	1
農学部	3年	1



2.4.10 マラン大学プログラム（インドネシア）

■概 要

インドネシアのマラン国立大学人文学部内にある BIPA と呼ばれるインドネシア語教育を担当する組織と連携してプログラムを開発した。佐賀大学生のみを対象としたインドネシア語とインドネシアの社会・文化を学習するための2週間のプログラムである。午前は毎日約4時間のインドネシア授業を受講し、基本的な文法の知識を獲得しながら単語や表現を増やした。6名の佐賀大学生に対し、2名の教員によるチームティーチングで授業が行われ、学生を飽きさせることのないインタラクティブな授業を提供してもらった。学生は「可能な限り英語を使わずインドネシア語のみを用いて授業が進行するので、習ったことの復習をしなければついていけなくなるような適度なプレッシャーもあり、中だるみすることなく集中して勉強ができた」と話している。午後はインドネシア人チューターと街へ出て、学習した表現を使用しながら様々な体験学習をした。また夕方はインドネシアの伝統楽器ガムランの授業がほぼ毎日2時間提供され、チューターと一緒に2つの曲を演奏できるようになった。通常、英語を学習する重要性は多くの学生の間で認識されているが、その他の外国語を学ぶことの意義がわからない若者も多い。そのような中で、本プログラムに参加した学生の中には、現地の人々の考えを現地の言葉で理解することこそが、その人やその国をより深く知ることに繋がるのだと気がついたと述べる学生もおり、言語を学ぶ意義やことばと社会や文化の関係について深く考える機会になったようである。もっと多くの学生に本プログラムに参加してもらいたいと思う一方、宿舎の問題や交通事情など物理的な課題が多くあるため、本プログラムの継続については検討の必要があると考えられる。

参加学生のうち5名が JASSO 海外留学支援制度奨学金、1名が佐賀大学奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成31年3月2日～18日（2週間）

■単位付与 海外交流実習（基本教養科目）2単位

■参加学生 6名

学部・研究科	学 年	人 数
農学部	1年	1
経済学部	1年	2
教育学部	1年	1
医学部	1年	1
医学部	2年	1



2.4.11 リトアニア・フィンランドプログラム（リトアニア・フィンランド）

■概 要

本プログラムは、平成28年度にリトアニアの協定校、ヴィダウタスマグヌス大学と連携し開発したプログラムに、交換留学先として人気のあるフィンランドでの研修を加えて新たに実施したものである。本プログラムではリトアニアとフィンランドの教育・社会・文化・歴史を中心に、専門家による講義、現地学生とのディスカッション、地域の人々との交流を行いながら学習する。リトアニアでは、ヴィダウタスマグヌス大学の通常の授業の中から、政治学、キャリアデザイン、リトアニア史などの授業を受講した。また日本語授業も訪問し、現地学生と日本語でディスカッションを行なった。これらの学生とは、複数回セッションがあり、グループで街へ出かけ、現地学生が日本語授業で作成した日本人向けの「カウナス案内冊子」を使用しながら、佐賀大生に日本語でカウナスの街を案内するという活動も授業の一環として行なった。期間中は全ての学生が3日から1週間のホームステイを経験し、一般市民の暮らしや習慣について学ぶ機会が得られた。ヴィダウタスマグヌス大学には杉原千畝記念館やホロコーストを含め、リトアニアの歴史的な建築物や博物館の視察に加え、現地の日本大使館訪問の機会も提供していただいた。日本大使館では外務省や大使館の機能や役割、日本とリトアニアの歴史的関係、経済や文化交流などについて一等書記官より講義をしていただいた。若手の外務省職員も交えて意見交換する時間をいただき、本学学生は海外で活躍する日本の若者の存在を誇りに思うと同時に、各々の卒業後のキャリアや大学で何を学ぶべきかについて考える姿が見られた。フィンランドでは、ヘルシンキ大学教育学部にて専門家によるフィンランドの初等教育から高等教育までの教育理念や制度に関する英語による講義を受講した。そのあと、実際に教育学部の授業に参加し、大学での学びやキャリアについて意見交換を行なった。フィンランド研修では当時、交換留学中であった教育学部所属学生2名のサポートもあったため、長期留学を考えている参加学生にとっては貴重な情報収集の機会にもなった。本プログラムの参加者全てが佐賀大学奨学金を受給した。

■担当教員 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

■実施期間 平成31年3月18日～28日（11日間）

■単位付与 なし

■参加学生 10名

学部・研究科	学 年	人 数
農学部	1年	2
農学部	2年	1
教育学部	2年	2
経済学部	1年	2
理工学部	2年	2
医学部	1年	1



2.5 学生の海外派遣支援（国際化支援制度）

2.5.1 平成30年度佐賀大学海外研修プログラム参加助成

番号	派遣先	支援人数 (参加学生数)	期間	プログラム名	助成額
1	韓国 大邱大学校	3 (10)	平成30年8月7日～ 平成30年8月25日	大邱大学校プログラム	180,000円
2	中国・ 浙江科技学院	1 (10)	平成30年8月13日～ 平成30年8月26日	浙江科技学院プログラム	60,000円
3	韓国・ 釜慶大学校	2 (10)	平成30年8月8日～ 平成30年8月18日	釜慶大学校プログラム	140,000円
4	オーストラリア・ ラトロープ大学	3 (7)	平成30年8月22日～ 平成30年9月29日	ラトロープ大学プログラム	300,000円
5	インドネシア・ マラン大学	2 (7)	平成30年8月22日～ 平成30年9月5日	UM iCamp マラン大学プログラム	140,000円
6	中国・ 浙江理工大学	4 (6)	平成31年3月2日～ 平成31年3月30日	浙江理工大学プログラム	209,320円
7	台湾・ 国立東華大学	2 (17)	平成31年2月17日～ 平成31年3月16日	国立東華大学プログラム	100,000円
8	香港・ 香港中文大学	4 (10)	平成31年2月17日～ 平成31年2月26日	香港中文大学プログラム	262,880円
9	アメリカ・ パシフィック大学	7	平成31年2月15日～ 平成31年3月3日	パシフィック大学プログラム	490,000円
10	インドネシア・ マラン大学	5	平成30年8月22日～ 平成30年9月5日	マラン大学プログラム	203,000円
11	リトアニア・ ヴィタウタスマグナス大学 フィンランド・ ヘルシンキ大学	10	平成31年3月18日～ 平成31年3月28日	リトアニア・ フィンランド研修プログラム	820,954円
計		43			2,906,154円

2.5.2 平成29年度佐賀大学学生海外派遣奨励費

番号	所属	学年	指導教員	留学先	留学期間	助成額
1	教育学部	2	山田 潤次	アメリカ スリップパリーロック大学	10ヶ月	300,000円
2	理工学部	3	上野 直広	アメリカ スリップパリーロック大学	10ヶ月	300,000円
3	経済学部	2	小西みも恵	フィンランド ユバスキュラ大学	4ヶ月	150,000円
4	理工学部	3	堂蘭 浩	リトアニア ヴィタウタスマグナス大学	12ヶ月	300,000円
5	経済学部	3	サーリヤ デシルバ	中国 華東師範大学	12ヶ月	300,000円
6	工学系研究科	M1	住 隆博	中国 北京工業大学	12ヶ月	300,000円

【帰国留学生の報告】スリッパリーロック大学（教育学部）

留学を通して、私はたくさんの人と出会い、たくさんのことを学ぶことができました。日本での価値観の物差しが通用しないことがたくさんあったり、言葉の障害などもありましたが、いろいろな人から支えられてとても充実した生活を送れたと思います。お金がかかることなので、一概に留学に行った方がいいとは言えませんが、留学に行くなら目的意識がないとダメだということも感じました。これは、留学生の選考段階でも聞かれることですが、現地で何を学びたいのか、それを学ぶのになぜこの大学でなくてはいけないのかなどは常に考えておかないと、留学先での生活にメリハリがなくなってしまいます。私は、音楽を勉強したいという目的で留学したのですが、日本にいた時と比べ、ジャズやクラシックなどを純粋に楽しく学べたと感じています。この経験は日本には決してできなかったと思うので、留学したことに大変大きな意義を感じています。この経験をもとにこれから佐賀大学での学びを深めて行きたいと思いました。

スリッパリーロック大学（理工学部）

留学を通して英語でのコミュニケーション能力の向上を図ることができたのは勿論ですが、実際の人と人とのコミュニケーションを通して異文化に対する許容力と理解力の向上ができました。またその影響で、従来の自分の考え方が変わった部分がありました。例えば、対人でコミュニケーションをとることの大切さや、英語を使って自分からコミュニケーションをスタートさせる難しさだったり、相手を第一印象のみで決めつけすぎないことです。やはり異なる文化的背景を持つ人とコミュニケーションをとる時に、実際には本当のところでの理解がなかなか追いついてこない時が多々あります。従って、最初の内は相手の発言の意図や、根本的な部分での考え方の違いが理解できないと思いますし、多少なりともそれがストレスになると思います。私は20年間日本でのみ暮らしてきたので、留學生活を通していかに自分本位で物事を決めつけてはならないし、郷に入ったら郷に従うことの大切さを学びました。留学に行く前にそういう広い視野を持っていれば、留学先で心がやんだりすることはかなり防げると思います。こういった経緯で、人と人とのつながりはしっかりと築いていくことが大切だということに気づくことができました。またその中でも特に友人間の交流は留学を充実したものにするために必須だと思います。例えば自分が留學中に苦しい時期を過ごしていても、友達がいれば相談でき、負担を和らげることができると思います。特に他の国から同じように留學しているインターナショナル生は境遇も似ているし、文化の違いによる苦しさという意味でも共感してくれるのでとても良い話し相手になると思います。交換留學の最高の目標は自分の学びたい学問を追究することですが、せっかく高い費用を支払って留學するので、後輩諸君には自分が今までしたことなかったような、或いは、聞いたこともなかったような新しいことにもどんどんチャレンジしてほしいなと思います。その最大のチャンスが留學だとも僕は思います。

ユバスキュラ大学（経済学部）

フィンランド留學を始めてからの現地で日々は充実したもので、4ヶ月半とはあっという間でした。授業が始まってからはなかなか思い通りにならず、悩んだり、体調を崩したりすることもありました。しかし、振り返って見ると自分自身の英語力の低さに対する悔しさから、昨日の自分よりもさらに上を、と目指して努力できたと思っています。留學を通して、日本人だけでなく海外の留學生と関わる機会を得られた事で、たくさんの刺激を受ける事ができました。さらに自分自身の進むべき道、やりたい事が見えてきたような気がしています。留學は全てが楽しいことばかりではありませんが、辛いことも含めて全て自分自身の自信に繋がると考えています。

2.5.3 平成30年度佐賀大学学生海外研修支援事業（申請11件中7件採択）

No.	所属	プログラム名	申請者	派遣国	研修期間	支援人数	助成額
1	理工学部	環アジア国際セミナー（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用にかかわる建築・都市デザインワークショップ）	三島 伸雄 教授	タイ、韓国、カザフスタン、オランダ、オーストリア、ミャンマー	8～22日 （行先により異なる）	10	500,000円
2	医学部	ハワイ大学臨床推論ワークショップ	小田 康友 教授	アメリカ	6日間	7	350,000円
3	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America	Peter Roux 講師	アメリカ	12日間	10	500,000円
4	経済学部	国際交流実習「グローバル化における中小企業の役割～日本とタイの経験を中心に～」	Saliya De Silva 教授	タイ	8日間	10	500,000円
5	理工学部	STEPs メンバーによる海外研修	Khan MD. Tawhidul Islam 准教授	台湾	5日間	10	500,000円
6	全学教育機構	第36回ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行	重竹 芳江 准教授	ドイツ	32日間	5	250,000円
7	芸術地域デザイン学部	交流協定校、BURG/Halle（ドイツ）とDAE（オランダ）との学生間交流とオランダで開催されるダッチデザインウィーク、DAE卒業制作展の視察を含む、芸術・デザイン関連機関をめぐる芸術デザイン研修	三木 悦子 講師	ドイツ オランダ	8日間	8	400,000円
合計						60	3,000,000円

【採択プログラムの成果報告】

1. 三島 伸雄 教授（理工学部）「環アジア国際セミナー（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用にかかわる建築・都市デザインワークショップ）」

地域の歴史的環境の保全・再生に代表される文化多様性を学ぶ場として、タイ・チェンマイおよびオーストリア・ウィーンを対象地として、参加学生に歴史的環境を継承しながら地域を再生する計画・デザインの提案に取り組ませた。タイには9名、オーストリア・ドイツには12名を派遣した。それらの研修活動を通して、建築・都市デザインにおける可能性と意義を学び、多様な国籍の学生間で共有することができた。国際性豊かな感覚を有し、異なる多様な文化を受け止め、地域の特質を理解し、多様な国籍の学生と議論し、デザイン性豊かな提案ができるような建築・都市デザイン分野の学生を輩出するという目標に対して、少なくとも、佐賀大学の学生は触発され、英語での成果物を作成した。そして、その作業を通じて、英語での議論に積極的に取り組むようになったと自己評価できる。

タイでは、チェンマイ大学主催でワークショップを行い、チェンマイ大学、タマサート大学、メイジョー大学、韓国交通大学校、アイントホーフエン工科大学が参加し、短期間ではあったが、集中的に対象地の調査・分析・計画・設計提案を行い、非常に多様で濃厚な交流を行うことができた。

オーストリア・ドイツでは、ウィーン工科大学の日本・オーストリア学術交流センター JASEC が主催して、建築・都市デザインのワークショップを行った。ドイツのシュツットガルト工科大学にも訪れ、バーチャルリアリティを研究しているグループと交流も行い、計画・設計した作品の3Dでのバーチャル体験を行い、最新の空間体験についても理解することができた。

2. 小田 康友 教授（医学部）「ハワイ大学臨床推論ワークショップ」

このプログラムでは、ハワイ大学で開催される臨床推論ワークショップに参加して臨床推論を系統的学習すること、英語環境下で講義をうけ議論をおこなうことで医学英語能力を向上させ、将来国際的に活躍できる医学生を育成すること、さらには国際的観点から日本の医学教育や医療を見つめなおし、将来我が国で必要とされる医療について考え学習することを目的としている。

今年度8月に、医学部医学科3、4年次より3名、3月に4名が参加した。ハワイ大学、全国から集った日本人医学生との協働・競争的環境でのワークショップに参加して、米国式の実践的な学習・臨床実技を経験することができた。8月の派遣中にハリケーンの影響でワークショップの期間が短縮してしまったが、参加者は、いずれも臨床医学および国際的コミュニケーションにおいて多くの学習経験を獲得し、今後の自己学習に対してのモチベーションが高まった。

臨床推論について医学知識と臨床技能を結びつけながら系統的に学習することで、帰国後も自身の学習方法が明確にできたことである。患者の症状から診断に至るまでにどのような鑑別診断を考えて必要な診察や検査を組み立てていくのかをシナリオに基づいて学習できた。禁煙指導のロールプレイでは、患者の生活背景を加味しながら、患者に適した生活指導を行う体験を通して、海外の患者に診察を行う模擬体験を経験できた。

次に、日本と米国の医学教育カリキュラムや学習モチベーションの違いを比較することができ、今後の学習目標を具体的に設定することができた。とくに医学英語能力と英語によるコミュニケーション能力は、将来国際的に活躍する医師として必須な能力である。すべての参加者が、プログラム参加中に英語能力を向上することができ、さらに今後の継続した学習目標に掲げていた。これらは今後の学習行動の向上と維持に大きな影響をあたえるものと期待できる。

3. Peter Roux 講師（全学教育機構）「Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America」

本プログラムでは、以下の2つの目的を設定している：①2週間のミニ留学体験を通して、長期留学へつなぐ。②ホームステイ、アメリカの学生との交流、ニューヨークでのフィールドワークを通して、グローバルな視野の育成を行う。このプログラムを通じ、学生が学業における目標を設定し、英語がもっと流暢になりたいという気持ちを持つことができた。

また、佐賀大学とスリッパリーロック大学間での研究交流・職員交流に向けた機会も持つことができた。

4. Saliya De Silva 教授（経済学部）「国際交流実習「グローバル化における中小企業の役割～日本とタイの経験を中心にして」

本プログラムの目的は、グローバル化する国際社会の諸相を多面的に考え、問題解決に積極的に関与できる資質を涵養することにある。そのためには、学生が本学で学んだ経済学の専門的な知識を発展させる機会の獲得が不可欠であり、発展途上国の経済発展の現状とそれらの国々が直面する諸問題について学生自らが経験を通して学べるように、現地の専門家の英語による講義の受講や調査活動、現地住民や学生との意見交換等の機会を組み込んだプログラムを提供することである。

今回の研修課題を「グローバル化における中小企業の役割」とし、事前研修では佐賀県や県内中小企業、海外実習ではカセサート大学の協力のもと、講義や調査の機会を与え、英語で具体的事例を比較的に考察させることで、学生は国際社会で出現している様々な事象について多面的に捉える機会を得、英語による発表等を通して表現能力の向上を身につけることができた。また、学生が学問的な成果を獲得するだけでなく、訪問国の文化や言語、習慣、宗教、民族を理解するで「相互理解」を基本とする国際交流の発展に貢献できるような人材に成長できる意識づけができた。

本プログラムは、研修課題について佐賀を中心に事前学習をし、カセサート大学で英語で発表する。海外実習

ではカセサート大学の教員による講義や学生の発表、現地調査などを通して、お互いが直面する諸問題について知識を共有し具体的事例を比較的に考察することができた。帰国後は、市民を対象にタイで学んだことを報告した。これらの一連の内容が、その後、交換留学や海外の大学院進学、さらには国際関係の職場に就くという進路進学の国際活動への動機づけという点で有意義な成果を挙げている。

5. Khan MD. Tawhidul Islam 准教授（理工学部）「STEPs メンバーによる海外研修」

本プログラムは台湾の協定校の学生や若手技術者と交流することで日本国外へと意識を向け、時代の動きに応じた世界的視野から自らの立ち位置をみる視野を養うことを目標としており、今回訪問した大学でSTEPs やメンバーの紹介を英語で行ったり学生同士の交流を行うことにより語学力の向上を今後の目標に掲げる学生がいたこと、更に台湾の大学の実験内容や設備に触れることにより本学との違いを認識できたことで学生の意識向上に繋がった。また、工場や博物館見学及び中国書道の体験等で台湾の技術や歴史及び文化に触れることができたことで、学生の視野を広げることができ目標を達成したと評価する。海外の大学教員や学生と英語での交流（意見交換）ができたことで学生自身が語学力に関し更なる向上心を持つことができた。

海外の大学の研究内容や実験施設を直接見ることができ、本学との研究方法の違いを認識し、研究・勉学面でも刺激を受けることができた。

6. 重竹 芳江 准教授（全学教育機構）「第36回ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行」

本プログラムの目的は、各自の興味と関心に応じた研修テーマについて事前調査をし、ドイツ語力、知識、人間的触れ合いといった多方面から学生を広い視野を持つ人材に育てることである。各自で設定した研修テーマに関しては、2年生の3名はレポートを作成したり、他大学との合同の週末合宿で相互に質問をし合うなどの事前研修を通じて旅行前に十分に準備ができていた。1年生の参加者はこの点の準備が不十分で、本人も反省点として挙げていた。ドイツ語力に関しては、授業での成績がそのまま反映される結果となった。一カ月にわたる集団生活であったが、メンバー同士でもホームステイ先で、も気持ちのいい対応をしていたことから、人間的触れ合いについては申し分のない成果を出すことができたと感じている。

今回は教育学部の音楽専攻の学生が全体の指導を引き受けてくれたおかげで全体の合唱のレベルが高く、非常に褒められた。昨年は（佐賀大学の）芸術学部の学生が訪問した先々で似顔絵を描いて喜ばれていたが、言葉や文化について準備していただくだけではなく、参加学生の特技を活かした活躍の場を想定した計画をしておくことにより一層の成果が期待できるように改めて感がさせられた。全学での授業であるため、参加する学生の専門分野は様々であるし、趣味や特技も各人各様である。積極的に自己をアピールできるようになればそれに比例してコミュニケーションも取りやすくなるようなので、この点も学んだ外国語を実地で活かすための手段として指導していきたいと思う。

7. 三木 悦子 講師（芸術地域デザイン学部）「交流協定校、BURG/Halle（ドイツ）と DAE（オランダ）との学生間交流とオランダで開催されるダッチデザインウィーク、DAE 卒業制作展の視察を含む、芸術・デザイン関連機関をめぐる芸術デザイン研修」

本プログラムは、欧州の名門校で学ぶことで、グローバルな視野を持ちつつ、地域に還元し活躍できる、次代を担う人材を育成する目的で作られている。プログラムの主な内容は、ハレ芸術大学及び DAE（デザインアカデミーアイントホーフェン）両校へ訪問し、授業や制作、施設見学を行い、留学の意識を高めること、プレゼンテーションと学生企画のワークショップを開催し、現地学生との交流を行うこと、欧州の芸術・デザイン関連施設を訪問し体感することである。

新設された学部の学生らには、先導する先輩の姿も無い始まったばかりの新しい協定校二校の協定や交流につ

いての認知度はまだ低い。そのため昨年度より受入れプログラムである“SPACE-ARITA”プログラムの交換留学生と交流する機会を積極的に設けているが、有田キャンパスを主にする彼らと、佐賀市に暮らす学生らとの接点は非常に少ない。“SPACE-ARITA”プログラムの交換留学生を受け入れると同時に、本プログラムを行うことで、交換留学生との接点を動機付けに、このプログラムが彼らの興味を誘引し、彼らの留学の足掛かりとなることを大いに期待している。

3. キャンパスの国際化

キャンパスにおける多文化共生、とりわけ留学生と国内学生の互恵的な関係を創出することを目指して、国際交流推進センターでは多様な活動を展開している。平成25年より異文化への理解と高いコミュニケーションスキルを備えた学生を「佐賀大学グローバルリーダーズ」として採用し、国際交流推進センター・国際課とが協働しキャンパスの多文化共生につながる取り組みを行なっている。メンバーには留学生も半数含まれ、留学生が常に「支援される側」としてではなく、キャンパス・コミュニティのメンバーとして共により良い環境をつくるために活動をしている。

平成30年度は多様な文化背景を持つ学部生・大学院生がグローバルリーダーズのメンバーとして活躍した。今年度は日本人以外にバングラデシュ、中国、インドネシア出身の学部生、大学院生10名がメンバーとなり、以下のような活動を展開した。

平成31年度のグローバルリーダーズの活動

活動名／実施時期	内容
CEL (Cultural Exchange Lounge) 4月～7月／ 10月～1月	お昼休みに留学生と国内学生が言語や文化の交流を行う活動
新入留学生の適応ワークショップ 5月・10月	新入留学生の異文化適応を促す活動
スポーツ交流 6月・11月	言語能力の有無に影響されないスポーツによる異文化交流
フェアウェルパーティー 8月・2月	卒業、修了する留学生の送別パーティー
オープンキャンパス 8月	高校生に留学生との異文化交流体験の機会を提供する活動
ピアサポート 通年	海外留学を希望する学生や留学生の相談に応える支援活動
カルチュラルナイト 12月	留学生・国内学生が母国の文化を紹介する最大のイベント

本年度はグローバルリーダーズの軸となる活動はCEL (Cultural Exchange Lounge) であった。お昼休みの1時間に国内学生と留学生が集い、昼食を取りながら外国語や外国文化についての会話を楽しむものである。学生主体で活動内容を決め、ファシリテーターも学生であるため、肩肘を張らず気軽に参加できるものと位置付けて活動を行ってきた。ピーク時には1年間1,300名を超える学生が参加していたが、年々その数が減ってきた。一つの改善方法として、これまでのLanguage Loungeという呼び名をCELに変更した。Languageという言葉が国内学生の心理的障壁となっているのではないかという学生の声によるものである。リーダー学生自身が試行錯誤をしながら活動を展開している表れである。H30年度は延べ821名の学生が中国語、韓国語、英語、インドネシア語、タイ語のラウンジに参加をした。

また学位取得を目指す留学生は国際交流にそれほど積極的ではないという傾向から、バイトや学業に多忙な正規留学生であっても気軽に参加ができるスポーツイベントを2回実施した。学生加えて教職員の参加もあり、留学生が研究室の同僚や母国出身者以外の人々につながる良い機会となった。

毎年年末に開催しているカルチュラルナイトは、大学会館改築中のため、かささぎホールにて盛大に行われた。

会場には8カ国の学生がブースを設置して文化の紹介や料理を紹介し、さらに6カ国の学生がパフォーマンスを披露した。色とりどりの民族衣装や、スパイスの香りと味、音楽や踊りなど、誰もがキャンパスの多様性を体感しながら楽しめるイベントとなった。本イベント開催にあたり、多くの学内教職員より寄附を頂戴した。この場を借りて暖かいご支援に感謝申し上げたい。

最後に、グローバルリーダーズの活動が多くの学生にとって魅力的かつ意義のあるものにするためには、リーダーズの資質や能力を向上させる研修に加え、教職員のコミットメントが重要である。しかし大学全体の国際交流をさらに発展させるためには、上記のような10名の学生と数名の教職員による取り組みでは不十分である。グローバル人材育成が叫ばれ始めて久しいが、それらは英語教育や、一部の学生を対象とした異文化理解教育や海外留学のみでは実現可能ではない。全ての学生に対しキャンパス内外の身近な異文化への気づきや関心を促し、いつでも対話の機会が得られるような取り組みや環境の整備を組織的に行う必要があると思われる。



インドネシア語ラウンジ



新入留学生ワークショップ



インドネシアの伝統舞踊・カルチュラルナイト



ベトナムのバンブーダンス・カルチュラルナイト

Ⅲ. 研究者交流

国際交流推進センターにおける従来の「国際研究者交流事業」は、研究者個人のつながりのみに依存し、継続性と組織的推進に課題があったため、平成30年度からは、国際交流の現状分析に基づく部局単位の国際交流のビジョン・方針を策定することとし、部局のビジョン・方針に沿った研究者交流等の事業を支援することとした。

以下は、平成30年度に支援対象となった事業の成果である。

平成30年度佐賀大学国際研究者交流事業

～～当初募集分～～

【芸術地域デザイン学部】研究者交流

「佐賀・韓国から提案する＜21世紀新アート・デザイン＞」

●事業概要

佐賀大学芸術地域デザイン学部の有田セラミック分野が有するハード・ソフト両面における強力なリソースと国民大学校デザイン学部のもつ前衛的なデザイン力と表現力を研究者交流によって融合させ、佐賀・韓国から世界に向けて新しいデザインの可能性を提案する。

このため、平成30年度から毎年、両校からそれぞれ2名程度の研究者を相互に派遣する。今年度はキックオフイベントとして、両校におけるワークショップ、レクチャーを実施する。

●相手国・相手機関 韓国・国民大学校

●支援額 150千円

●国際共同研究の成果

国民大学校との国際交流ロードマップにのっとり、今年度は国民大学校にて平成30年11月21（水）～23（金）日、田中右紀教授による講演及び制作レクチャーが行われた。また同日、国民大学校造形大学姜鍊美学長と今後の交流の進め方について協議し、交流の進展を同意した。国民大学校から平成31年1月29～31日、権講師と大学院生8名が芸術地域デザイン学部本庄キャンパスと有田キャンパスを訪問、本庄キャンパスでスライドプレゼンテーションなど学術交流を行う。

●その他の成果

国民大学校造形大学の設備と教員・学生の組織の規模の大きさと国際的で積極的な表現活動は、佐賀大学の教員と学生にとって大きな刺激となっている。また、大学院や博士課程の表現としての質の高さも学ぶところが有る。また、有田の焼き物文化について韓国の教員と学生は大変興味を持って学んでいる。

●次年度以降の取組予定

平成31年度も引き続き両校から教員を派遣し、講演やレクチャー等の学術交流を行う。焼き物以外の芸術の分野について更にお互いに紹介し、他分野の教員の交流につなげていく。

【経済学部】研究者交流

日本・台湾におけるマイノリティの法的地位の比較研究 ―ダイバーシティの推進を目指して―

●事業概要

平成30年5月23日に設立された台湾・国立勤益科技大学・日本研究センターと共同して、マイノリティ（性的マイノリティ、原住民（少数民族）、障がい者、外国人）の法的地位のあり方及びありようについて共同研究を行う。研究の過程で、研究者交流（派遣延べ3名、受入2名）を予定している。

●相手国・相手機関 台湾 国立勤益科技大学・日本研究センター

●支援額 250千円

●国際共同研究の成果

相手先研究者と、公法学分野における日本・台湾の比較研究に関する課題を共有し、経済学部が主催となった国際シンポジウムを2回にわたり開催した。

また、本学の井上准教授、児玉准教授が、相手先機関の外部研究員に就任し、今後も共同研究を継続していくこととなった。

●外部資金獲得の成果

【獲得】

2018年度 JFE21世紀財団・アジア歴史研究助成採択（児玉准教授）

【申請予定】

2019年度 野村財団国際交流助成申請（児玉准教授）

2020年度 りそなアジア・オセアニア財団調査研究助成申請（児玉准教授）

●その他の成果

(1) 研究交流を通じて、日本法と台湾法の比較研究における課題を共有した。本事業によって開催した2回の国際シンポジウムを今後も定期的に開催していくことで合意した。

(2) 本事業が基礎となって学生交流の別の事業も発足した。平成30年度は、学部生18人を10日間台湾に派遣した。

●次年度以降の取組予定

(1) 本事業によって開催した2回の国際シンポジウムの成果をもとにした論文が2019年夏頃に台湾で発表される予定である。

(2) 本事業によって開催した国際シンポジウムの後継シンポジウムを2019年8月頃本学で実施する予定である。財源は、本事業を成果とすることによって獲得した上記JFE21世紀財団から拠出する予定。

(3) 相手方研究者である周副教授が、2019年8～9月に本学に客員研究員として滞在する予定であり、一層の共同研究の進展が期待される。

(4) 本事業が基礎となって発足した学生交流についても、2019年度に実施する予定である。学部生10人を台湾に派遣する予定。

【理工学部】研究者交流

中国・北京工業大学との建築・土木工学分野における共同研究の推進

●事業概要

主担当教員および協働教員は本年3月末に北京工業大学を訪問し、施設見学および意見交換を行った。その際に、陳超教授が空調の省エネ関連の研究を、許成順教授が地盤の液状化関連の研究を進めておられることが分かった。さらに、5月には北京工業大学・執行部による訪問を受け、小島研究室および末次研究室を見学して頂き、陳教授および許教授との共同研究の可能性について理解頂いた。そこで、今回、本事業予算で陳教授および許教授を招聘し、共同研究について具体的な打ち合わせを行うものである。招聘時期は7月を予定している。

●相手国・相手機関 中国 北京工業大学

●支援額 250千円

●国際共同研究の成果

8月6～11日に相手先の教員2名を受入れ、本学において研究打ち合わせをした。10月15～11月15日に本学の教員2名が相手先を訪問し、共同研究を実施した。

相手先での共同実験の成果を同大学の大学院生が国際会議IASUR2019（2019年3月29～31日）で発表する。このテーマで共同研究を継続する予定である。

●外部資金獲得の成果

【申請予定】

平成31年度 国際共同研究強化基金(B)申請 小島教授

平成31年度 国際共同研究強化基金(B)申請 末次准教授

●次年度以降の取組予定

北京工業大学から大学院生入学の受入れを検討する予定である。

【理工学部】 学生交流・研究者交流

エクスポラシオン・フランス2018

●事業概要

今年度、新たに採択されたエクスポラシオン・フランス2018の事業スキームをベースにフランスブルゴーニュ大学の大学院施設 (ESIREM) を教員と大学院学生とで訪問し、研究者・学生間の交流を行う。そして、その成果を今後の共同研究 (AIによる画像解析技術の研究) に結びつける。現在、前記事業にて本年9月に教員が訪問を計画しており、その際に本学科の博士課程前期2年生の学生を帯同させる。学生は、教員の帰国後にそのまま2週間程度滞在し、インターンシップを経験する。この実績を今後の学生の海外研修の相手先としての関係構築につなげたいと考えている。

●相手国・相手機関 フランス ブルゴーニュ大学

●支援額 350千円

●国際共同研究の成果

先方の Prof. Julien Dubois、および、Dr. Cyrille Migniot の2つの研究グループと共同研究を実施するべく、データの送受信と、意見交換などを継続して行っている。当方の担当学生は、大学院への進学が決まっており、研究をさらに発展させ外部資金獲得や学生交流につなげたいと考えている。

●外部資金獲得の成果

2019年度日本学術振興会 SAKURA プログラム、2019年度日本学生支援機構海外留学支援制度への応募を行った。残念ながら採択に至らなかったが、SAKURA プログラムはA評価 (上位20%)、海外留学支援制度は補欠となり、次年度は採択を目指して再チャレンジする。

●その他の成果

帰国後に3名の大学院学生から受け入れの希望があった。経済的な理由などから、このうち1名を、次年度4月～8月の5ヶ月間、特別研究学生として受け入れることとなった。この学生は、期間終了後にもさらに長期の受け入れを希望しており、その後、博士後期過程に進学することも計画している。

●次年度以降の取組予定

上記の外部資金に加えて、次年度は日本学術振興会の国際共同研究加速基金(B)への応募も予定しており、いずれにしても、できる限り早期に、外部予算の獲得と共同研究体制の確立を目指したいと考えている。

【理工学部】 研究者交流

ブルゴーニュ大学とのセラミックスナノテク交流事業

●事業概要

ブルゴーニュ大学とセラミックスナノテクノロジーに関する共同研究を行う。まず、研究者交流 (派遣1名) を行い、その後、実際に共同研究を実施したい。2017年10月に渡教授がブルゴーニュ大学を訪問後、2018年3月に Naddine MILLOT 教授が佐賀大学を訪問して研究のプレゼンテーションがなされ、セラミックスナノテクノロジーに関する共同研究を実施できる可能性が高いことが分かった。今回の研究者交流では、共同研究を実施す

ることになる矢田が実際にブルゴーニュ大学の Naddine MILLOT 教授の研究室を訪問し、どのような共同研究ができるのか議論し、共同研究をスタートさせる。

●相手国・相手機関

フランス ブルゴーニュ大学

●支援額 350千円

●国際共同研究の成果

2019年3月24日～29日にブルゴーニュ大学 Millot 教授を矢田が訪問して研究内容や研究設備の説明を受け、多くの教職員を紹介してもらった。また、Millot 教授と2019年度の共同研究内容を議論した。さらに、新たに紹介していただいた、研究分野に近い Julien Boudon 准教授及び Lionel Maurizi 研究員とナノ粒子に関する意見交換を行い、2019年度の共同研究への協力を仰いだ。

●外部資金獲得の成果

「次年度以降の取組予定」に記載の通り、2019年度前期にセラミックスを用いたナノバイオに関する研究が具体的に始まるが、その成果をもとに、まずは、科研費への申請を行いたい。

●その他の成果

Millot 教授と Frdjani 先生と本学の渡教授と話し合いを進め、2019年4月8日～6月28日に特別研究生として JEAN-PIERRE LE 君（ブルゴーニュ大学修士学生）を矢田の研究室で受け入れることが決まった。また、2019年5月27日～8月26日（予定）に矢田がブルゴーニュ大学に CNRS（フランス国立科学研究センター）Research Director として招聘されることが決まった。

●次年度以降の取組予定

特別研究生の JEAN-PIERRE LE 君には、矢田 G のセラミックスナノ粒子の合成に関する研究を行ってもらう予定である。また、矢田はブルゴーニュ大学において、表面修飾ナノセラミックスを用いたナノバイオに関する研究を行う予定である。2019年度の研究が着実に進み、予算のめどがつけば、本学学生や関連教員をブルゴーニュ大学に連れていき、交流をより密に進めて拡げていきたい。

【農学部】 学生交流 研究者交流

世界的な視野を涵養する農学国際教育の推進

●事業概要

農学部に入學する多くの学生も相当数が在學中に留學を希望し、これまでもアジア・オセアニア地域に多くの学生を長期交換留學生として送り出してきたが、カリキュラムの問題から留年を余儀なくされる事象が多く、學生に時間的、および経済的負担を強いているのが実情である。

本事業では、英語で授業が開講されているペラデニア大学農学部・大学院農学研究科をモデルとして設定し、将来的に他地域の協定校で提供される授業科目、および地域の安全性（治安水準）、授業以外で得られる効果等を留學希望學生に提供し、現在大學評価で低値である国際教育点を上昇させ、「留學支援の佐賀大學」として、優秀な學生をリクルートし、将来的に全學の国際交流教育水準を引き上げることを目的とする。

●相手国・相手機関

スリランカ ペラデニア大學農学部・農学研究科

●支援額 300千円

●国際共同研究の成果

・スリランカ地産植物抽出物が持つ抗酸化作用物質の特定と疾患動物モデルでの効果測定（ペラデニ大學農学部 Suranga 氏－農学部・辻田 講師）、科研費基盤B（国際）に応募予定。すでにSPACEプログラムで Suranga 氏の學生が佐賀大學で研修中。

・スリランカペラデニア市における女性労働環境の調査研究（ペラデニア大学農学部 Kumari 氏－農学部・稲岡・藤村）。現在 JASSO プログラムで農学部 4 年山田さんが派遣中。

・農学部作物科学学科 Sriyagoda 氏と農学部・鈴木・鄭との間で共同研究を実施するための予備調査を開始することで同意。

●外部資金獲得の成果

・JASSO 協定校派遣プログラムに応募し、採択された。今後工学研究科および農学研究科の大学院生を対象に派遣学生を増やす予定。同時に、ペラデニア大学からは複数名の学生を SPACE プログラムに応募してもらうように依頼。

・JASSO 協定校受け入れプログラム、さくらサイエンスプログラム等に応募して、先方の若手教員などを短期間で受け入れることを目指す。

●その他の成果

スリジャワルダナプラ大学では医学部（特に医工学分野）、都市農業、工学分野での交流を期待されている。学長は佐賀大学で学位を取得した卒業生でもあり、スリランカアカデミア界に影響力を持つ人物でもあることから、交流担当者を決めて、交流の実績作りに取り掛かる必要があると考える。

●次年度以降の取組予定

・共同研究の推進と、研究費の獲得（辻田 講師）

・平成31年度スリランカ～日本ジョイントシンポジウムでの公演・参加

・スリジャワルダナプラ大学との交流準備

・JASSO 受け入れプログラム、さくらサイエンスプログラム等による受け入れプログラムの実施、運営

【全学教育機構】 学生交流 研究者交流

語学教育、国際理解教育及びカルチュラル・インテリジェンスに関する共同研究

●事業概要

平成25年度から継続して学生を派遣し、平成28年度からは学生の受入を開始し、真の意味での相互交流を実現している米国スリッパリー・ロック大学と本学の教員が、語学教育、国際理解教育及びカルチュラル・インテリジェンス（Cultural Intelligence、CQ）に関する共同研究を行う。現在全学教育機構の授業の一環として毎年2回学生を米国に派遣しているが、本事業を通じて、とりわけCQの観点から学術的見地に立って教育及び交流の質をさらに高め、学生がよりよいグローバル市民となり得るための共同研究を行い、国際的な学会誌への投稿を目指す。平成30年度は、現行の学生交流に合わせて本事業によって派遣2名及び受入2名の研究者交流の実施も予定している。

●相手国・相手機関

米国 スリッパリーロック大学

●支援額 300千円

●国際共同研究の成果

相手先研究者と、語学教育、国際理解教育及びカルチュラル・インテリジェンス（Cultural Intelligence、CQ）に関する課題を共有した。例えば、アメリカを訪問した日本人学生に対するアンケート調査を行うなどして、CQの向上に関する研究を実施した。本学の江口准教授と Roux 講師、相手先の Ishimaru 教授が中心のプロジェクトチームにて共同研究を進めた。

●外部資金獲得の成果

【獲得】2019年度 JASSO 海外留学支援制度（協定派遣） 江口 誠 准教授

【申請】2019年度 科研費（基盤C）申請 Petrus Roux 講師

●その他の成果

合計3回に渡る日本及びアメリカでの研究者交流を通じ、国際理解教育の重要性を確認し、当該分野の共通課題を共有した。また、これからの発展的な取組の可能性についても協議し、早速、2019年度の相互交流から実践することとなった。また、CQの向上についても、引き続き調査を行うことで合意した。

●次年度以降の取組予定

2019年5月に予定されているSRUによる佐賀訪問時に、上述プロジェクトチームでの共同研究を予定しており、これまでの成果を踏まえ、2019年6月頃に Petrus Roux 講師、江口誠准教授、Yukako Ishimaru 教授3名での共著論文として国際誌への投稿を計画しており、現在執筆中である。

【肥前セラミック研究センター】研究者交流

やきもの素材及びプロダクトデザイン研究プログラム

●事業概要

・ KICET (Korea Institute of Ceramic Engineering and Technology) とやきもの素材 (磁器素地、釉薬など) に関する共同研究を行う。

研究者の短期間交流を予定している。

学術協定締結に向けて努力する。

・ EKWC (Europees Keramisch Werkcentrum) と将来のプロダクトデザイン交流についての会談を行う。

・ Space&Matter と肥前陶磁器の新素材を用いた陶磁器製品の共同デザイン開発を行う。

●相手国・相手機関

韓国

・ KICET (Korea Institute of Ceramic Engineering and Technology)

オランダ

・ EKWC (Europees Keramisch Werkcentrum)

・ Space&Matter

●支援額 350千円

●国際共同研究の成果

KICET の副院長、陶磁器センター長等を招き今後の交流協議を行い、今後の共同研究のための研究交流に関する MOU を締結した。

●外部資金獲得の成果

【獲得】平成30年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究代表者：赤津 隆 (支給期間H30～H32年度の総額455万円、間接経費105万円を含む)。

●その他の成果

・ KICET との協議で、2021年日中韓 The 12th Asian Ceramic Ware Symposium 有田開催を検討することになった。

・ EKWC との交流協議で、陶磁器デザイン等に関して継続して交流し実績を積み上げることで合意した。

・ Space & Matter との協議で、有田焼製ミニチュア Lloyd Hotel 製品開発に向けたデザイン共同開発へ進展させることで合意した。

●次年度以降の取組予定

KICET、EKWC、Space & Matter との交流を進め、国際陶磁器シンポジウムの有田での開催、EKWC との交流深化、Space & Matter との有田窯元製造による欧州新製品の創出等を念頭に交流を深めていく予定である。

～～追加募集分～～

【芸術地域デザイン学部】 研究者交流、学生交流

雲南大学芸術学院との学術国際交流（研究者及び学生）

●事業概要

雲南大学芸術学院と研究者・学生の交流をおこない、アートの表現や技術における新しい可能性を見出し、研究教育の推進や地域貢献につなげる。

平成30年度は研究者交流（派遣2名、受入3名）を予定している。

●相手国・相手機関

中国 雲南大学芸術学院

●支援額 400千円

●国際共同研究の成果

平成30年11月に法人から交流のために資金を得、それから交流のための構築・運営体制を構築した後、相手方にメールで交流のスケジュールや内容について提案した。しかしながら、連絡がうまくつかず、1月には電話をしたが、その後まもなく春節に入り、交流の計画を進めることができなかった。

●次年度以降の取組予定

31年度にはじっくり時間をかけて、交流に着手したいと考えている。相互に訪問を果たし、具体的な交流計画をつくり、実のある国際交流につなげたい。

【理工学部】 研究者交流 学生交流

理工学部とベトナム国家大学・ホーチミン市校・情報科学大学との教育・研究連携推進と学部間協定の締結

●事業概要

本事業では、本学と相手校の教員の相互訪問を通じて、相互理解の促進、学部間交流協定の締結を目指す。本校からは、渡学部長と福田学科長（知能情報システム学）が（株）Citynow Asiaのタイ氏と共にUITを訪問し、Vu副学長と協定について相談している。そこで、今回はVu副学長およびLuu国際課長を本学へ招聘し、理工学部の状況を知って頂くと同時に奥村教授、福田教授、および上田助教が研究紹介および研究室紹介を行う。その後、奥村教授がUITを訪問し、具体的な交流協定について話し合う。

研究者交流（派遣1名、受入2名）を予定している。

●相手国・相手機関

ベトナム ベトナム国家大学（VNU）・ホーチミン市校（HCMN）・情報科学大学（UIT）

●支援額 400千円

●国際共同研究の成果

本学から、奥村教授がUITを訪問し、UITの教員や学生に対して共同研究シーズの講演を行った。UIT訪問者へ教育・研究紹介を行い、共同研究のための情報交換を行った。

●次年度以降の取組予定

今後は、奥村教授が窓口となり、定期的にUIT側とインターネットミーティングを行いながら、共同研究課題の選定、本校担当教員の選定、共同研究の推進を行う。

また、プログラミングコンテストなどの共同イベントの実施、本校教員による講義の実施（9月、奥村教授が渡航を計画中）等を進め、予算が獲得でき次第、学生の相互交流に発展させていく予定である。

【理工学部】 研究者交流 学生交流

インドネシア国際協働教育研究コンソーシアム

●事業概要

1) 平成29(2017)年より始動している同学工学部土木工学科・国際コース生の4年生進級後、2ヶ月間のインターンシップ生としての本学理工学部理工学科(旧・都市工学科)への受入。この間の本学大学院理工学研究科博士前・後期課程への進学に関する積極的推奨、に関する覚書の締結(派遣2名:渡学部長・日野)。

2) 佐賀県内企業の開発技術に基づく深層混合処理工法のインドネシアへの実装に関する共同研究の推進に関する打合せ(派遣2名:渡学部長・日野)。

3) スラウェシ島地震に伴う同低平地の中・長期的問題の予測、解決策および復興策に関する共同研究の推進に関する打合せ(派遣2名:渡学部長・日野)。

重点国であるインドネシア・ハサヌディン大学との交流を基軸として:

- 1) 大学院博士前・後期進学者数の恒常的確保
- 2) 学術研究交流の持続的発展
- 3) 国内外における競争的外部資金の共同申請・獲得の期待
- 4) 佐賀県における地方創生事業への成果還元
- 5) わが国における他に類を見ない国際交流実績

が図れる。

●相手国・相手機関

インドネシア ハサヌディン大学

●支援額 358千円

●国際共同研究の成果

相手先研究者との間で、低平地防災・環境(2018年9月宮崎耕治学長表明)の一環に数えられる2018年スラウェシ島地震に伴う震災メカニズムの解明および同島の中長期ビジョンに基づく復興支援に関する課題などについて共有した。

本学の押川英夫准教授、相手先のラスディン・アンディ准教授を中心とする共同研究などを進めることとなった。

●外部資金獲得の成果

【申請予定】

平成32年度 科研 海外研究強化(B) 三島悠一郎講師(公募がなされる場合)

平成32年度 科研 基盤研究(B)以上2件 日野剛徳教授・押川英夫准教授

平成32年度 研究拠点形成事業(Core-to-Core Program) 日野剛徳教授、等

●その他の成果

国際低平地研究協会(IALT)発行の審査付英文論文集「Lowland Technology International」(EI付、Scopus IF=0.4、編集委員長:日野教授)の編集事務局をハサヌディン大学に移行し、同論文集の持続的発展の安定化を図った。平成35年度までは本学が同論文集の主導権を握ることができる。

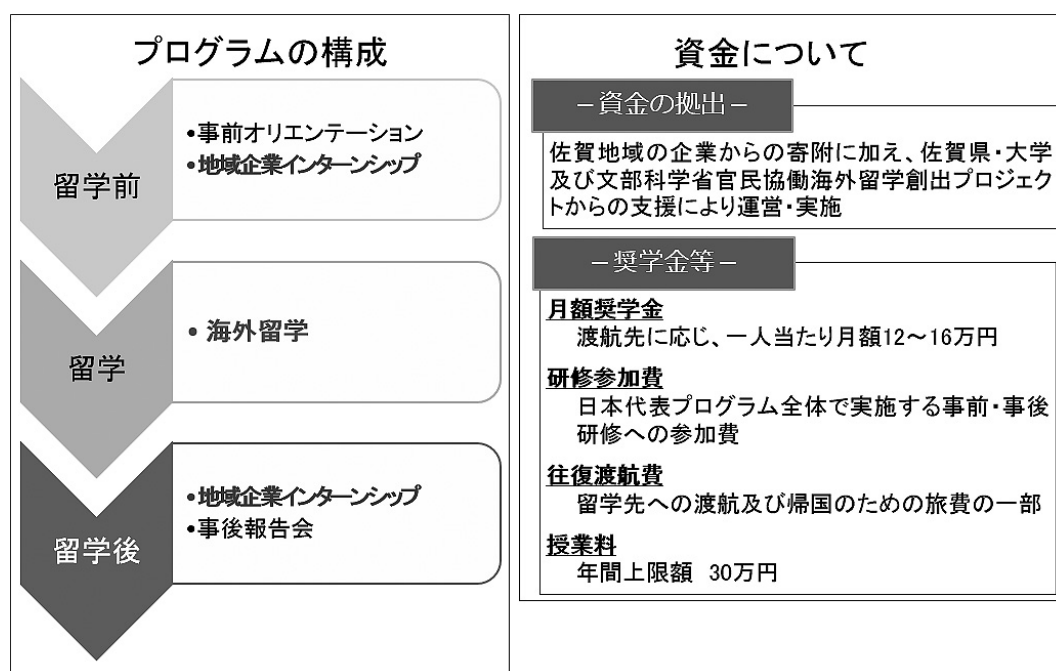
●次年度以降の取組予定

早期にタデラコ大学との間の大学間交流協定の締結が必要。これに伴い、スラウェシ島の南北における主要3都市に位置する三つの大学との間の大学間交流協定が完成し、理工学部都市工学部門をコーディネーターとして一大研究・教育拠点を形成することができる。さらにカリマンタン島におけるランブンマンクラット大学を組み込み、インドネシアにおける当学の国際協働教育研究コンソーシアムを拡充・発展させる。

IV. 地域国際連携

1. 世界とともに発展する SAGAN グローバル人材育成事業

本事業は、「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」の実施母体である「さが地方創生人材育成・活用推進協議会」（会長：宮崎耕治 佐賀大学学長）が平成28年度より実施している、海外留学と県内企業でのインターンシップを組み合わせた海外留学支援事業である。



プログラムの構成及び資金について

三年度目となる今年度は本学学生から1件の応募があり、書面審査に続き、支援企業等による面接審査の結果1名が採用され、ドイツへと飛び立つことができた。また、留学前の県内企業でのインターンシップには、幸楽釜徳永陶磁器株式会社の協力を得ることができた。

1.1 事前オリエンテーション

【日 時】2018年7月25日（水）9時30分から16時30分

【場 所】佐賀大学本庄キャンパス教務課会議室

【参加者】地域人材コース第9期生 2名

【内 容】第一部 インターンシップ、ビジネスマナーについて
 第二部 佐賀県政の概要・佐賀県の国際戦略について（佐賀県庁）
 第三部 佐賀県の産業構造について（佐賀県庁）
 第四部 危機管理オリエンテーション個別リスクマネジメント

2018年度（第9期）派遣留学生として、佐賀大学生1名、佐賀女子短期大学生1名が参加した。学生たちは今回の事前オリエンテーションに参加したことにより、多くの情報・知識を得たと同時に、仲間との交流を深める一日となった。



事前オリエンテーションの様子

1.2 派遣留学生壮行会

【日 時】2018年8月29日（水）14時00分から16時00分

【場 所】佐賀大学大学会館2階多目的ホール

【内 容】派遣留学生2名が留学計画の説明を交えながら決意表明を行った。昨年留学した先輩学生の激励をこめた留学報告に耳を傾け、海外留学及び国内でのインターンシップに向けて決意を新たにした。

交流会では出席者と派遣学生との意見交換が行われ、派遣留学生は多くの支援企業様と交流した。



全体集合写真



意見交換会

2. 佐賀県立武雄高校との交流

●佐賀県立武雄高校との交流

平成27年度より、佐賀大学留学生と佐賀県立武雄高校の交流を開始した。平成30年度は以下の交流Ⅰ～Ⅱを行った。2回の交流の参加者や内容の詳細は以下の表のとおりである。

いずれの交流も、留学生にとっては①日本事情を知る（学校生活や部活、武雄市の名所）、②日本人高校生と交流する、という経験を得るまたとない機会となったと考えられる。武雄高校の生徒にとっても同様であろう。

これらの交流は、今後も、継続して行っていく方針である。

項目	交流 I	交流 II
授業科目／プログラム	SUSP・香港中文大学サマープログラム	SPACE-J・日研生のための科目「日本事情研修D」
授業担当者	吉川・山田	吉川・布尾
場所	武雄高校	
実施日	平成30年7月11日（水）	平成30年7月21日（土）
参加留学生	21名	37名
内容	SUSP 及び香港中文大学からの短期受け入れの留学生が参加。英語中心。 内容： ①英語授業（2校時分：1年生・2年生）での英語による学生交流、世界の遊び体験、国紹介 ②部活動見学	スポーツと余暇をテーマとして日本事情について学ぶ授業の一環。日本語中心。 内容： ①ゲーム・自己紹介・交流 ②部活動見学



交流 I の様子



交流 II の様子

3. 佐賀地域留学生等交流推進協議会の取組

「佐賀地域留学生等交流推進協議会」（以下、推進協議会）は、佐賀地域に在住の、留学生と地域住民との交流により、相互の文化理解と友好親睦を深めることを目的に、平成元年に設立され、平成30年度現在、県内50団体（教育機関、地方公共団体、経済団体、国際交流関係団体等）で構成されている。

年1回、実務者レベルで組織される「運営委員会」と、構成員全員で組織される「総会」が開催され、推進協会の活動等について協議が行われてきた。

平成30年度は、これまで形骸化していた推進協議会の取組を活性化させるため、国際交流推進センターから、「運営委員会」及び「総会」にて、「地域活性化を見据えた留学生と地域との交流促進のための取組み」として、メーリングリストを活用した地域の伝統行事・イベントの情報集約と、参加した留学生の体験談のフィードバックと主催団体の事例報告の仕組を提案し、平成30年度中に活用事例の第1号(伊万里市・国際交流ひろば)があった。

この事例では、メーリングリストを活用しつつ、伊万里市から国際交流推進センターへ留学生の参加者募集案内があり、国際交流推進センターで参加希望者を取りまとめ伊万里市へ連絡した後、双方で当日の詳細等につい

てやり取りが行われた。

行事後は、参加してよかった点、改善してほしい点等の留学生の体験談が伊万里市にフィードバックされ、伊万里市からは、留学生の意見を今後の事業に役立てたい等の事例報告があり、伊万里市の行事改善にプラスとなった。

次年度、この仕組みを活用した団体や行事に参加した留学生に「運営委員会」や「総会」の場で発表してもらうことで、この仕組みのさらなる拡大を図り、留学生と地域住民の交流促進につなげたい。

～以下、伊万里市の事例報告～

項目	記入欄
行事名	平成30年度「国際交流ひろば」事業
開催日時	平成31年（2019年）3月3日（日） 13：30～16：30
場所	伊万里市民図書館ホール
行事の内容	佐賀大学留学生等を講師に招き、その国の気候、文化、習慣等を学ぶとともに、簡単な遊びを通して市内小学生と外国人が触れ合う機会を提供。
参加者数	総数64名（うち留学生等12名） <内訳> 佐賀大学留学生 5名（インドネシア2・バングラデシュ3） インドネシア技能実習生 5名（伊万里市内事業所勤務） 伊万里市国際交流専門員 1名（中国） 伊万里市公務研修生 1名（中国）
以下、留学生からの体験談を基に記入願います。	
参加してよかったと思う点 （留学生からの主な意見）	<ul style="list-style-type: none"> ・子供達と一緒に楽しく遊ぶことができた。 ・自国の文化を紹介できて参加者は喜んでくれた。 ・自国の文化、食べ物、服装のこと等、興味を持って聞いてくれた。
改善してほしい点 （留学生からの主な意見）	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の通訳を手配して欲しい。 ・日本語で作成した資料（PPT）を準備するよう事前に教えて欲しい。
その他 （留学生からの主な意見）	<ul style="list-style-type: none"> ・時間どおり国際交流ひろば事業が進められ、大変良かった。 ・参加者全員、協力的だった。 ・素晴らしい事業に誘って頂き、感謝している。 ・伊万里市民図書館の施設内容が大変良かった。
意見を受けての次回以降の取組み	<p>事業実施に向けた事前協議など、貴大学担当者とスムーズに打合せ等ができ、また、貴大学留学生のご協力に感謝しております。</p> <p>留学生からの意見にもあるとおり、通訳の手配や日本語版資料の作成依頼など、失念していたこともありましたので、来年度の事業実施に向けた反省材料とさせていただきます。</p> <p>また、本市の子供達は、外国籍の方と触れ合う機会が少ないため、今後とも貴大学のご協力を頂き、年に1～2回は、このような事業を実施できればと考えております。</p> <p>参考までに、事業実施後の参加者アンケートを一部ご紹介いたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>（参加者アンケートより）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色々な国の文化が学べたので良かった。 ・もっと他の国のことも知りたい。 ・外国の方と触れ合えて、いい機会だった。 ・外国の「こんにちは」の言い方が分かって良かった。 ・子供が外国のことに興味を持ったことがとても良かった。 ・是非、来年以降も継続して実施して欲しい。 ・これからの社会は国際交流抜きでは生活できない世の中になった。異文化を異なった色メガネで見るとは無く、他の国を尊重し、興味を持つことで友好が保てる。このような事業が増えると子供達にとっても刺激になって良いと思う。 ・部分的に言葉の問題で進行が上手く行かない場面があったので、通訳を入れる検討をされた方が良いと思う。 ・小さい子供にとっては、少し長いと感じた。 ・小さい子供は長い時間、座ると飽きやすく、じっとしてられない様子だった。 ・一緒に触れ合って、何かを作る（作業する）ような企画があった方が良いと思う。

V. その他住環境整備等

1. 佐賀大学国際交流会館

佐賀大学では国際交流の促進に寄与するため、外国人留学生および外国人研究者の居住施設として「佐賀大学国際交流会館」（以下、会館）を有している。

会館は単身者用宿舎としてのA棟、夫婦・家族用宿舎としてのB棟、家族者用宿舎としてのC棟がある。A B棟の竣工はそれぞれ平成2年である。C棟については、職員宿舎のひとつであった職員西宿舎（昭和45年竣工）を転用し平成28年10月から留学生用宿舎として運用している。

各棟の居室数はA棟42室、B棟11室、C棟20室となっている。A棟には共用施設として1階にラウンジ、2階に会議・研修室、和室を設けていて居住者同士や留学生と日本人学生との交流、学内外の交流団体等との交流の場として提供している。

A B棟の各居室には生活上の設備として各居室にユニットバス、トイレを設置し、ベッド、クローゼット、エアコン、冷蔵庫、ガスコンロ等の様々な備品類を備え、居住者が快適に生活できるよう支援している。また、インターネット接続サービスを学外業者と提携して使用できるようにしている。

管理面では、会館に館長及び主事を置き、前者は国際交流推進センター長が、後者は国際課長が務め、会館の管理運営に当たっている。

会館には、一部居室を日本人学生（大学院生又は3,4年次学部学生）4人に提供し混住させている。彼らは留学生のチューターとして生活上の相談相手やルールの助言を担っている。

会館入居者の防災意識を高めるため、年1回消防訓練を地元消防署の指導の下に実施している。この防災訓練では実際に火災が発生したことを想定し入居者全員による避難訓練を行うほか、実際に消火器を使った消火訓練も体験させ、非常事態発生時に即時対応できる心構えを体得させている。

平成28年の旧職員西宿舎の留学生宿舎転用により、留学生の住環境は格段に向上したものの、一方で竣工から45年以上を経過し、経年劣化による管理維持が深刻な問題となっている。毎年、漏水等の小規模な緊急修繕を重ねているが、留学生が安心快適に居住することで学業に専念できるよう、大学として計画的な修理・修繕計画が求められるところである。

2. その他の住環境支援

上記会館の入居者以外の留学生は、大学周辺の民間アパート等に入居することとなる。

このうち、交換留学生及び日本語・日本文化研修留学生に対しては、アパート等9物件の情報を提供し、住環境を支援している。

また、その他の支援として、留学生が貸主とアパート賃貸借契約を締結する際、連帯保証人が見つからない場合には、（公財）日本国際教育支援協会が実施している「留学生住宅総合補償」（以下、保険）への加入を条件に、国際交流センター長名で連帯保証人となる機関補償制度を平成12年から実施している。

なお、留学生が本学を途中離籍した場合、保険は補償外となる一方で、貸主と締結した契約書は離籍後も連帯保証は継続するため、離籍した留学生の家賃滞納や原状回復の責が本学に及ぶことから、センター長名の連帯保証期間を留学生の在籍時のみとする保証書を定め平成29年度より実施している。

・国際交流会館の入居率

	区分	居室数	寄宿料 (共益費含む) (円)	平成28年度 入居率(%)	平成29年度 入居率(%)	平成30年度 入居率(%)
留学生用	単身	40	8,200	85.8	100.0	97.5
	夫婦	3	12,300	100.0	0.0	66.7
	家族	4	15,000	79.2	79.2	100.0
	家族 (旧:西宿舎)	20	13,400	95.0	97.5	100.0
研究者用	単身	2	15,000	85.8	50.0	66.7
	夫婦	2	24,000	100.0	54.2	16.7
	家族	2	33,000	79.2	75.0	44.4

家族室については、2人シェア又は3人シェアを可能としている。

資料1：学長・理事表敬訪問及び学術交流

○5月15日 ブルゴーニュ大学（フランス）理事表敬訪問

大学院生交流に関する意見交換のため、Sami Ferdjani（ESIREM: Engineering school of research in Materials and Infotronique 国際関係担当）が訪問。

○11月6日 10月24日 ヴァルドワーズ県（フランス）代表団 学長表敬訪問

バイオ産業大学（フランス）との学術交流協定調印式のため、Ms. Florence DUFOUR（バイオ産業大学長）ほか9名が訪問。



2月22日 浙江大学（中国）理事表敬訪問

学生交流に関する意見交換のため、Prof.Tang Xiaowu（国際教育学院副院長）ほか3名が訪問。



資料2：国際交流推進センター事業関連の海外出張・訪問

期間	行先（国）	訪問先	用件	出張者名
平成30年8月22日 ～8月27日	インドネシア	ブラウイジャヤ大学、 マラン国立大学	SUSAP UM iCamp マラン大学プログ ラム引率等	山田 直子 准教授
平成30年11月10日 ～11月13日	ベトナム	ハノイ国家大学外国語大 学 他	宮崎学長の講演、 今後の交流についての意見交換等	宮崎 耕治 学長 山田 直子 准教授
平成30年11月24日 ～11月30日	スペイン	サラマンカ大学、ピカソ 美術館、プラド美術館	日西学長会議、視察	宮崎 耕治 学長 兒玉 浩明 理事 山田 佳奈美 コーディネーター
平成30年12月15日 ～12月19日	ドイツ	ブルグ・ギービエン シュタイン芸術デザイン 大学ハレ	派遣交換留学生の現地における支援の ため	山田 佳奈美 コーディネーター
平成31年2月14日 ～2月19日	インドネシア	ボゴール農業大学、 ガジャマダ大学 他	佐賀大学海外版ホームカミングデー in ジャカルタ・ジョグジャカルタ	宮崎 耕治 学長 寺本 憲功 理事(センター長) 山田 直子 准教授 吉田 規雄 国際課長 山田 佳奈美 コーディネーター 出雲 大輔 主任
平成31年2月17日 ～2月20日	台湾	東華大学	SUSAP 東華大学プログラム参加学 生の引率	布尾 勝一郎 准教授
平成31年2月17日 ～2月26日	中国・香港	香港中文大学	SUSAP 香港中文大学交流プログラ ム参加学生の引率	吉川 達 講師
平成31年3月1日 ～3月6日	インドネシア	マラン国立大学	SUSAP マラン大学プログラム参加 学生の引率 他	山田 直子 准教授
平成31年3月18日 ～3月24日	リトアニア フィンランド	ヴィタウタスマグヌス大学 ヘルシンキ大学	SUSAP リトアニア・フィンランド プログラム参加学生の引率	山田 直子 准教授
平成31年3月25日 ～3月31日	リトアニア	ヴィタウタスマグヌス大学	エラスムス+事業の研究シェア、 留学交流、 SUSAP 参加学生とのミーティング	古賀 弘毅 准教授

資料3：平成30年度 留学生数

国・地域 Country・Region	学部等 Faculties	合計 Total	学部 Undergraduates												学部計 Total
			教育学部 Education		芸術地域 デザイン学部 Art and Regional Design		経済学部 Economics		医学部 Medicine		理工学部 Science and Engineering		農学部 Agriculture		
			国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	
計 Total		240	0		3		19		0		21		1		44
			0	0	0	3	0	19	0	0	0	21	0	1	
中華人民共和国 People's Republic of China		79						15				1			16
Bangladesh 人民共和国 People's Republic of Bangladesh		26													0
マレーシア Malaysia		19				1						16			17
インドネシア共和国 Republic of Indonesia		19										1			1
大韓民国 Republic of Korea		18				2						1		1	4
台湾 Taiwan		15													0
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam		14						3							3
タイ王国 Kingdom of Thailand		8													0
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka		5													0
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia		5										1			1
ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myanmer		8						1							1
フランス共和国 French Republic		3													0
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany		3										1			1
フィンランド共和国 Republic of Finland		1													0
リトアニア共和国 Republic of Lithuania		3													0
オーストラリア Commonwealth of Australia		1													0
ナイジェリア連邦共和国 Federal Republic of Nigeria		1													0
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt		2													0
チュニジア共和国 Republic of Tunisia		1													0
モザンビーク共和国 Republic of Mozambique		3													0
サントメ・プリシンペ民主共和国 Democratic Republic of Sao Tome and Principe Sao		1													0
南スーダン共和国 Republic of South Sudan		1													0
エチオピア連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Ethiopia		1													0
ガーナ共和国 Republic of Ghana		1													0
ルワンダ共和国 The Republic of Rwanda		1													0
南アフリカ共和国 Republic of South Africa		1													0

(平30. 5. 1現在) As of May 1, 2018

大学院 Graduate Schools												大学院 計 Total	研究生 科目等履修生 特別聴講学生 Research- Part-Time Students- Special Audit	鹿児島大学 大学院連合 農学研究科 United Graduate School of Agricultural Kagoshima University	日本語・ 日本文化 研修生 Japanese Studies Students	その他 計 Total	国費・私費 計 Total			
修士課程 (博士前期) Master's Course				博士課程 Doctoral Course		博士後期課程 Doctoral Course		国費 National Expense	私費 Private Expense											
地域デザイン研究科 Regional Design in Art and Economics	医学系研究科 Medicine		工学系研究科 Science and Engineering		農学研究科 Agriculture		医学系研究科 Medicine			工学系研究科 Science and Engineering										
国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense			
18		1		24		12		6		42		103	81		11		1	93	40	200
2	16	0	1	7	17	1	11	3	3	19	23		2	79	5	6				
	14		1		4		1	1	3		14	38		25				25	1	78
				5		1		2		9	2	19		2	3	2		7	20	6
					1							1		1				1	0	19
1	1			1			1			1	2	7		11				11	3	16
	1				2						1	4		10				10	0	18
							4					4		11				11	0	15
					1		1			1	1	4		4		3		7	1	13
1					1					3	2	7		1				1	4	4
											1	1		1	2	1		4	2	3
										1		1	1	2				3	2	3
				1	3					3		7						0	4	4
												0		3				3	0	3
												0		2				2	0	3
												0		1				1	0	1
												0		2			1	3	1	2
												0		1				1	0	1
					1							1						0	0	1
					1							1		1				1	0	2
										1		1						0	1	0
							2					2	1					1	1	2
					1							1						0	0	1
					1							1						0	0	1
							1					1						0	0	1
							1					1						0	0	1
					1							1						0	0	1
												0		1				1	0	1

資料4：学術交流

(平30. 4. 1現在)

国名 Country	学術交流協定大学等 Partner Universities and Institutes	協定締結年月日 Since	
大学間 University		計89校	
大韓民国 Republic of Korea	全南大学校 Chonnam National University	平3. 3. 8 Mar. 8, 1991	
	安東大学校 Andong National University	平9. 12. 11 Dec. 11, 1997	
	国民大学校 Kookmin University	平11. 3. 29 Mar. 29, 1999	
	釜山大学校 Pusan National University	平12. 2. 2 Feb. 2, 2000	
	木浦大学校 Mokpo National University	平12. 8. 3 Aug. 3, 2000	
	釜慶大学校 Pukyong National University	平14. 4. 18 Apr. 18, 2002	
	濟州大学校 Cheju National University	平14. 8. 9 Aug. 9, 2002	
	韓国技術教育大学 Korea University of Technology and Education	平14. 10. 8 Oct. 8, 2002	
	光州女子大学校 Kwangju Women's University	平17. 7. 14 Jul. 14, 2005	
	培材大学校 Pai Chai University	平18. 7. 11 Jul. 11, 2006	
	牧園大学校 Mokwon University	平19. 5. 16 May. 16, 2007	
	大邱大学校 Daegu University	平19. 6. 26 Jun. 26, 2007	
	中華人民共和國 People's Republic of China	華東師範大学 East China Normal University	平10. 5. 15 May. 15, 1998
		北京工業大学 Beijing University of Technology	平10. 12. 8 Dec. 8, 1998
首都師範大学 Capital Normal University		平11. 4. 12 Apr. 12, 1999	
中国農業大学 China Agricultural University		平12. 10. 17 Oct. 17, 2000	
遼寧師範大学 Liaoning Normal University		平13. 11. 6 Nov. 6, 2001	
ハルビン工業大学 Harbin Institute of Technology		平13. 11. 12 Nov. 12, 2001	
華東理工大学 East China University of Science and Technology		平15. 4. 1 Apr. 1, 2003	
浙江理工大学 Zhejiang Sci-Tech University		平16. 9. 6 Sep. 6, 2004	
西南政法大学 Southwest University of Political Science and Law		平19. 10. 31 Oct. 31, 2007	
浙江科技学院 Zhejiang University of Science and Technology		平19. 12. 25 Dec. 25, 2007	
遼寧大学 Liaoning University		平20. 4. 30 Apr. 30, 2008	
温州大学 Wenzhou University		平30. 5. 28 May. 28, 2018	
台湾 Republic of China, Taiwan		輔仁カトリック大学 Fujen Catholic University	平13. 8. 9 Aug. 9, 2001
		国立政治大学 National Chengchi University	平16. 9. 13 Sep. 13, 2004
		国立中興大学 National Chung Hsing University	平16. 9. 14 Sep. 14, 2004
	国立台北大学 National Taipei University	平17. 10. 6 Oct. 6, 2005	
	国立東華大学 National Dong Hwa University	平18. 6. 30 Jun. 30, 2006	
	元培科技大学 Yuanpei University	平19. 7. 6 Jul. 6, 2007	
	国立連合大学 National United University	平20. 8. 8 Aug. 8, 2008	

台湾 Republic of China, Taiwan	文藻外語学院 Wenzao Ursuline College of Language	平21. 9. 4 Sep. 4, 2009	
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Vietnam	ハノイ農業大学 Hanoi University of Agriculture	平12. 12. 7 Dec. 7, 2000	
	ノンラム大学 Nong Lam University	平18. 11. 9 Nov. 9, 2006	
	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 University of Language and International Studies-Vietnam National University, Hanoi	平19. 8. 6 Aug. 6, 2007	
	ビン大学 Vinh University	平23. 2. 21 Feb. 21, 2011	
	ベトナム国家大学ハノイ校自然科学大学 University of Science-Vietnam National University, Hanoi	平24. 3. 13 Mar. 21, 2012	
	ベトナム国家大学ハノイ校工科大学 University of Engineering and Technology-Vietnam National University, Hanoi	平24. 3. 13 Mar. 21, 2012	
	アンザン大学 An Giang University	平25. 3. 11 Mar. 11, 2013	
	カントー大学 Can Tho University	平28. 8. 21 Aug. 21, 2016	
	カンボジア王国 Kingdom of Cambodia	プノンペン王立法経大学 Royal University of Law and Economics	平19. 8. 24 Aug. 24, 2007
王立農業大学 Royal University of Agriculture		平19. 11. 21 Nov. 21, 2007	
王立プノンペン大学 Royal University of Phnom Penh		平24. 11. 30 Nov. 30, 2012	
ラオス国立大学 National University of Laos		平22. 1. 26 Jan. 26, 2010	
タイ王国 Kingdom of Thailand	カセサート大学 Kasetsart University	平8. 12. 6 Dec. 6, 1996	
	コンケン大学 Khon Kaen University	平10. 9. 28 Sep. 28, 1998	
	チェンマイ大学 Chiang Mai University	平17. 9. 9 Sep. 9, 2005	
	アジア工科大学 Asian Institute of Technology	平19. 11. 21 Nov. 21, 2007	
	モンクット王ラカバン工科大学 King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang	平20. 1. 3 Jan. 3, 2008	
	タマサート大学 Thammasat University	平25. 2. 13 Feb. 13, 2013	
	インドネシア共和国 Republic of Indonesia	ハサヌディン大学 Hasanuddin University	平13. 3. 9 Mar. 9, 2001
ガジャマダ大学 Gadjah Mada University		平13. 11. 1 Nov. 1, 2001	
サムラツランギ大学 Sam Ratulangi University		平14. 9. 13 Sep. 13, 2002	
リアウイスラム大学 Islamic University of Riau		平15. 7. 2 Jul. 2, 2003	
スリビジャヤ大学 Sriwijaya University		平19. 6. 11 Jun. 11, 2007	
ダルマプルサダ大学 Darma Persada University		平21. 9. 4 Sep. 4, 2009	
セベラスマレット大学 Sebelas Maret University		平23. 3. 28 Mar. 28, 2011	
ジュアンダ大学 Djuanda University		平23. 7. 15 Jul. 15, 2011	
マラン国立大学 State University of Malang		平23. 12. 7 Dec. 7, 2011	
ボゴール農業大学 Bogor Agricultural University		平23. 12. 27 Dec. 27, 2011	
ジャカルタ国立大学 State University of Jakarta		平26. 2. 11 Feb. 11, 2014	
ブラウイジャヤ大学 University of Brawijaya		平26. 4. 14 Apr. 14, 2014	
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh		バングラデシュ工科大学 Bangladesh University of Engineering and Technology	平13. 4. 27 Apr. 27, 2001
		ラジャヒ大学 Rajshahi University	平15. 5. 18 May. 18, 2003
		バングラデシュ農科大学 Bangladesh Agricultural University	平16. 8. 28 Aug. 28, 2004

バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	ジャハンギールナガル大学 Jahangirnagar University	平22. 7. 26 Jul. 26, 2010
	チッタゴン工科大学 Chittagong University of Engineering	平22. 9. 30 Sep. 30, 2010
	ダッカ工科大学 Dhaka University of Engineering and Technology	平25. 2. 20 Feb. 20, 2013
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka	ペラデニヤ大学 University of Peradeniya	平11. 11. 30 Nov. 30, 1999
パキスタン・イスラム共和国 The Islamic Republic of Pakistan	コハート科学技術大学 Kohat University of Science and Technology	平19. 4. 27 Apr. 27, 2007
	ペシャワール大学 University of Peshawar	平19. 11. 10 Nov. 10, 2007
英国 United Kingdom	グラスゴー大学 University of Glasgow	平10. 7. 17 Jul. 17, 1998
ルーマニア Rumania	アレクサンドルイオンクザ大学 Alexandru Ioan Cuza University	平13. 9. 11 Sep. 11, 2001
フランス共和国 French Republic	ブルゴーニュ大学 L'Universite de Bourgogne	平15. 7. 1 Jul. 1, 2003
	オルレアン大学 L'Universite d'Orleans	平17. 3. 31 Mar. 31, 2005
	バイオ産業大学 School of Industrial Biology	平29. 11. 6 Nov. 6, 2017
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany	ブルク・ギービヒェンシュタイン芸術デザイン大学ハレ Burg Giebichenstein University of Art and Design Hale	平29. 3. 30 Mar. 30, 2017
オランダ王国 the Netherlands	デザインアカデミーアイントホーフェン Design Academy Eindhoven	平28. 10. 19 Oct. 19, 2016
フィンランド共和国 Republic of Finland	ユバスキュラ大学 University of Jyväskylä	平25. 11. 8 Nov. 8, 2013
ポーランド共和国 Republic of Poland	ルブリン工科大学 Lublin University of Technology	平18. 3. 3 Mar. 3, 2006
リトアニア共和国 Republic of Lithuania	ヴィタウタスマグナス大学 Vytautas Magnus University	平25. 8. 26 Aug. 26, 2013
アメリカ合衆国 United States of America	アンダーソン大学 Anderson University	昭53. 12. 27 Dec. 27, 1978
	カリフォルニア大学デイビス校 University of California, Davis	平9. 7. 24 Jul. 24, 1997
	パシフィック大学 Pacific University	平20. 2. 29 Feb. 29, 2008
	スリッパリーロック大学 Slippery Rock University	平24. 4. 4 Apr. 4, 2012
カナダ Canada	マニトバ大学 University of Manitoba	平17. 8. 8 Aug. 8, 2005
	ウィルフリッド・ロリエ大学 Wilfrid Laurier University	平22. 7. 13 Jul. 13, 2010
オーストラリア連邦 Australia	ラトローブ大学 La Trobe University	平15. 7. 31 Jul. 31, 2003
	シドニー工科大学 University of Technology, Sydney	平24. 8. 28 Aug. 28, 2012

資料5：佐賀大学学術交流協定取扱要項

(平成31年1月22日制定)

(趣旨)

第1 この要項は、佐賀大学（以下「本学」という。）における学術交流協定（以下「協定」という。）の締結に関し必要な事項を定めるものとする。

(協定締結の目的)

第2 協定は、外国の優れた大学、研究所等（以下「大学等」という。）との交流を推進することにより、本学の研究及び教育の活性化を図ることを目的として締結する。

(協定の区分)

第3 協定は、大学間協定と部局間協定に区分する。

2 「大学間協定」とは、本学が外国の大学等と大学間交流を実施するため、相互の学長名により締結する協定をいう。

3 「部局間協定」とは、本学の部局が外国の大学等、又は関係する部局等と学術交流を実施するため、相互の部局長名により締結する協定をいう。

(協定の締結要件)

第4 大学間協定は、次の各号のいずれかに該当し、及び学長が必要と認めたときに締結することができる。

(1) 複数の部局で同一の大学等との交流実績があり、それぞれ同時に協定を締結しようとするとき。

(2) 既に一部局で交流実績があり、他の部局も交流しようとするとき。

(3) 既に交流実績のある部局又は部局間交流協定を締結している部局において、当該部局及び相手大学等の双方が、大学間協定を締結することを希望している場合で、かつ、相手大学等から要請があるとき。

(4) その他本学の国際交流戦略上、大学間協定を締結することが必要なとき。

2 部局間協定は、部局単位で既に交流が実施されている場合又は協定締結後の交流計画が具体化している場合で、かつ、部局長が必要と判断したときに締結することができる。

(協定書及び附属文書)

第5 第2に規定する協定締結の証として、協定書を作成するものとする。

2 前項の協定書には、協定による交流の大綱、具体的な交流の実施方法等を規定するものとする。

3 前項の規定にかかわらず、協定の具体的な交流の実施方法等については、協定書に代えて附属文書を作成し、規定することができる。

4 協定書及び附属文書（以下「協定書等」という。）は、原則として英語で作成するものとする。ただし、双方の合意がある場合は、双方の母国語で作成することができる。

(協定の有効期限)

第6 協定を締結又は更新しようとする場合は、協定書等に有効期限を規定するものとし、その期間は5年以内とする。

(協定書等の署名者及び発効日)

第7 大学間協定の署名者は、学長とする。ただし、附属文書の署名者は、研究・社会貢献担当理事が兼ねる副学長（以下「副学長」という。）とすることができる。

2 部局間協定の署名者は、部局長とする。ただし、学長又は副学長の連署を必要とする場合は、第8第2項に定める事前相談の際に、理由書を添付し、申し出るものとする。

3 協定書等の発効日は、双方の署名が完了した日とする。

(協定締結手続き)

第8 大学間協定を締結する場合は、協定締結を希望する部局の長から次に掲げる書類を添えて学長に申請するものとする。

- (1) 大学間交流協定締結申請書（別紙様式第1号）
- (2) 協定書等の原案
- (3) 協定を締結する大学等の概要

2 前項に規定する場合において、協定締結を希望する部局の長は、事前に国際交流推進センター長に相談するものとし、国際交流推進センター長は、協定締結の意義等を確認するとともに、協定書原案について書類確認を行うものとする。

3 学長は、大学間協定の締結を承認した場合は、第1項に規定する部局の長に対し、書面で通知するものとする。

第9 部局間協定の締結は、次に掲げる書類により、当該部局において行うものとする。

- (1) 部局間交流協定締結調書（別紙様式第2号）
- (2) 協定書等原案
- (3) 協定を締結する大学等の概要

2 第8第2項の規定は、部局間協定を締結する場合において準用する。

3 部局長は、部局間協定を締結した場合は、当該協定書等の写しを添えて速やかに学長に報告しなければならない。

(更新、内容変更及び終結)

第10 大学間協定又は部局間協定を更新又は内容を変更しようとする場合の手続きは、締結手続きに準ずるものとする。

2 部局間協定を終結した場合は、終結届を学長に提出する。

3 大学間協定を締結した場合は、特段の事情がある場合を除き、当該大学間協定を締結した大学等と現に締結している部局間協定は終結するものとする。

(協定書等の保管)

第11 協定書等の保管部局は、次の各号に掲げる区分に従い、当該各号に掲げるとおりとする。

- (1) 大学間協定 国際交流推進センター
- (2) 部局間協定 当該部局の担当事務部

(事務)

第12 協定に関する事務は、関係部局等の協力を得て、学術研究協力部国際課が行う。

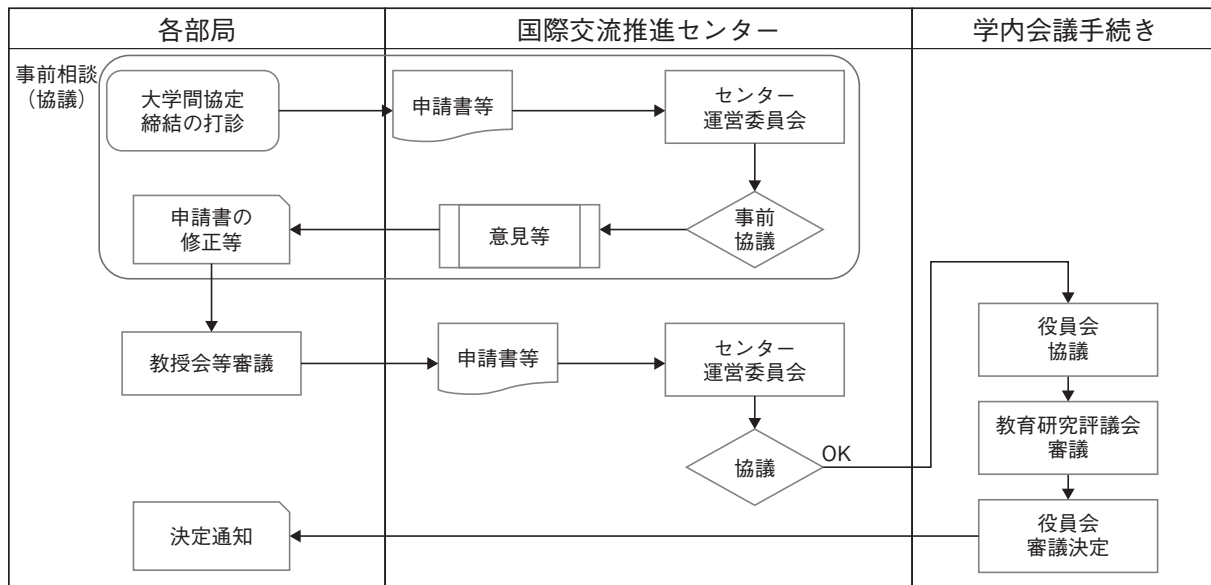
(雑則)

第13 この要項に定めるもののほか、協定に関し必要な事項については、国際交流推進センター運営委員会の議を経て、国際交流推進センター長が定める。

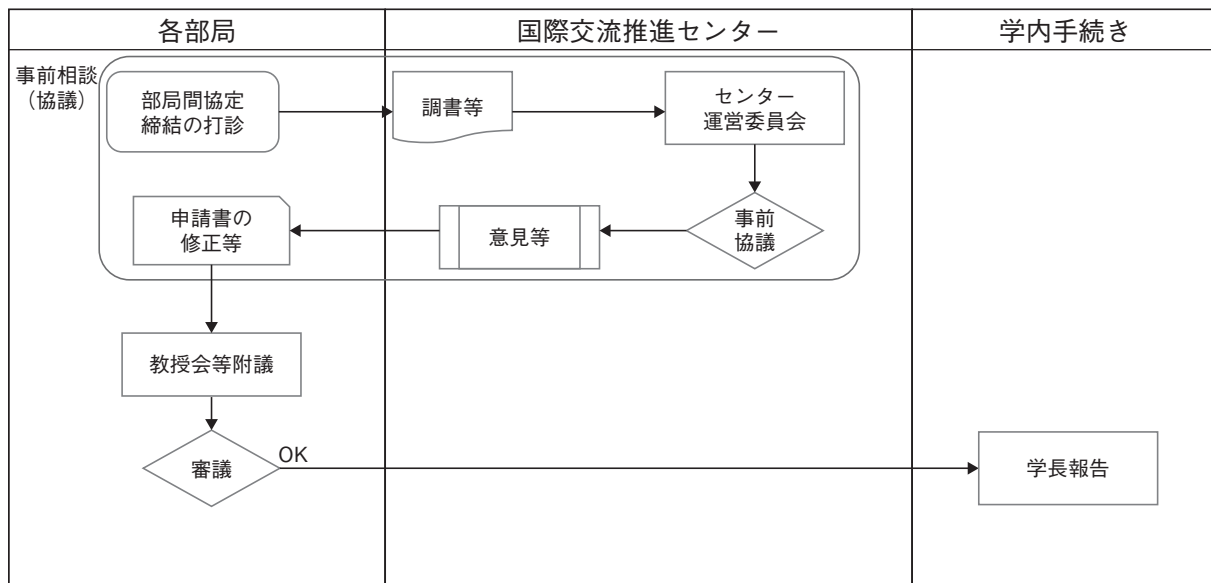
附 則

この要項は、平成31年1月22日から実施する。

大学間学術交流協定締結の手続きの流れ



部局間交流協定締結の手続きの流れ



資料6：平成30年度 国際交流推進センター関連行事

H30	佐賀大学の派遣・教育・支援	留学生に対する教育・支援	国際交流推進事業
4月	6日 世界とともに発展するSAGANグローバル人材育成事業学内説明会	3日 新入留学生オリエンテーション 4日 日本語コース・プレースメントテスト 6日 SPACE-E/Jオリエンテーション 14日 新入留学生研修旅行 19日 留学生健康診断 28日 SPACE-E フィールドワーク（福岡市、太宰府市）	
5月			1日 第1回国際交流推進センター運営委員会 10日 第2回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 29日 第3回国際交流推進センター運営委員会
6月		2日 SPACE-J・日研究生フィールドワーク（唐津市） 20日 消防訓練（楠葉寮・国際交流会館A・B） 27日 鹿島ガタリンピック	18日 第4回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 26日 国立大学法人留学生センター等留学生指導担当研究協議会
7月	3日 佐賀大学サマープログラム（～17日） 4日 香港中文大学サマープログラム（～13日） 25日 世界とともに発展するSAGANグローバル人材育成事業事前オリエンテーション	14日 SPACE-E フィールドワーク（朝倉市） 21日 SPACE-J・日研究生フィールドワーク（武雄市）	4日 第5回国際交流推進センター運営委員会 13日 第6回国際交流推進センター運営委員会（メール会議）
8月	8日 釜慶大学校プログラム（韓国）（～19日） 7日 大邱大学校プログラム（韓国）（～25日） 13日 浙江科技学院プログラム（中国）（～26日） 22日 ラトロープ大学プログラム（オーストラリア）（～9/29） 22日 Umi Camp マラン大学プログラム（インドネシア）（～9/5） 29日 世界とともに発展するSAGANグローバル人材育成事業派遣留学生壮行会	5日 栄の国まつり参加（栄の国まつり振興会主催） 8日 日本語・日本文化研修コース終了式	10日 第7回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 29日 第8回国際交流推進センター運営委員会（メール会議）
9月		27日 新入留学生オリエンテーション 28日 SPACE-E/Jオリエンテーション	
10月		13日 新入留学生研修旅行（佐賀市内） 15日 留学生健康診断（18日・女性） 28日 さがを創る大交流会（さが地方創生人材育成・活用推進協議会主催）	1日 第9回国際交流推進センター運営委員会 25日 佐賀地域留学生等交流推進協議会総会（佐賀地域留学生等交流推進協議会主催） 29日 第10回国際交流推進センター運営委員会
11月		4日 SPACE-E フィールドワーク（熊本市） 17日 SPACE-J・日研究生フィールドワーク（有田町）	5日 第11回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 9日 全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議 13日 第12回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 20日 国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会 22日 第13回国際交流推進センター運営委員会
12月		11日 留学生対象の被爆体験講話	17日 第14回国際交流推進センター運営委員会
1月			4日 第15回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 30日 第16回国際交流推進センター運営委員会
2月	15日 パシフィック大学プログラム（アメリカ）（～3/3） 17日 香港中文大学学生交流プログラム（中国）（～26日） 17日 国立東華大学プログラム（台湾）（～3/16）	5日 SPACE-E フィールドワーク（小城市） 15日 佐賀大学短期留学プログラム終了式	16日 佐賀大学海外版ホームカミングデー in ジャカルタ・ジョグジャカルタ 26日 第17回国際交流推進センター運営委員会
3月	2日 マラン大学プログラム（インドネシア）（～18日） 2日 浙江理工大学プログラム（中国）（～30日） 18日 リトアニア・フィンランドプログラム（～28日）		4日 第18回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 22日 第19回国際交流推進センター運営委員会

資料7：国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター規則

(平成23年9月28日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人佐賀大学基本規則（平成16年4月1日制定）第11条の7第2項の規定に基づき、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、佐賀大学の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との国際交流並びに外国人留学生及び海外留学を希望する学生に必要な教育を行うことを目的とする。

(業務)

第3条 前条に掲げる目的を達成するため、センターは次に掲げる業務を行う。

- (1) 国際交流事業の企画・実施に関すること。
- (2) 海外教育研究機関等との学生交流に関すること。
- (3) 海外教育研究機関等との学術研究交流に関すること。
- (4) 地域の国際連携に関すること。
- (5) その他本学の国際交流の推進に必要なこと。

2 前項の業務に関し必要な事項は、別に定める。

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 専任の教員
- (4) 国際マネージャー
- (5) 契約コーディネーター
- (6) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長は、理事のうち学長が指名した者をもって充てる。

2 センター長は、本法人の国際交流事業をつかさどり、センターの職員を統督する。

3 センター長の任期は、当該理事の任期とし、再任を妨げない。

(副センター長)

第6条 副センター長は、本法人の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

2 副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を掌理する。

3 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、当該副センター長を指名したセンター長の任期を超えることができない。

4 副センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(国際コーディネーター)

第7条 センターに、国際コーディネーターを置き、センターの専任教員のうちから、センター長が指名する者及び契約コーディネーターをもって充てる。

2 国際コーディネーターは、センター長及び副センター長を補佐し、センターの業務を横断的かつ包括的に処理する。

(契約コーディネーターの選考)

第8条 契約コーディネーターの選考は、第11条に定める運営委員会の議を経て、学長が行う。

第9条 削除

(国際マネージャー)

第10条 センターに、国際マネージャーを置き、学術研究協力部国際課長をもって充てる。

2 国際マネージャーは、国際コーディネーターと協働してセンターの業務を処理する。

(運営委員会)

第11条 センターに、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 本法人の国際戦略に関する事項
- (2) 本法人の中期目標・中期計画のうち、国際交流の推進に関する事項
- (3) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (4) センターの専任教員の配置要望その他センターの人事に関する事項
- (5) 本法人の国際化に係る具体的施策の策定及び実施に関する事項
- (6) センターの予算及び決算に関する事項
- (7) その他センターの管理運営に関する重要事項

(組織)

第12条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) 副センター長
 - (3) 各学系から選出された教員 各1人
 - (4) 学術研究協力部長
 - (5) 国際コーディネーター
 - (6) 国際マネージャー
 - (7) 日本語教育を担当するセンターの専任教員のうち、センター長が指名した者 1人
- 2 前項第3号に掲げる委員の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 3 第1項第3号に掲げる委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第13条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

(議事)

第14条 運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

- 2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、教員の人事に関する事項及び特に重要な事項については、出席した委員の3分の2以上の賛成を必要とする。

(意見の聴取)

第15条 運営委員会は、必要に応じて、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(審査会)

第16条 運営委員会に、国際交流事業の選考を行うため、審査会を置く。

- 2 審査会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第17条 センター及び運営委員会の事務は、各部局及び事務局関係各課の協力を得て、学術研究協力部国際課が行う。

(雑則)

第18条 この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項については、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

- 1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。
- 2 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置規則（平成16年5月18日制定）は、廃止する。
- 3 この規則施行後、最初に任命される第7条の副センター長及び第8条の鍋島サテライト長並びに第9条の室長及び部門長の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第9条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 4 この規則施行後、最初に任命される第12条の併任の教員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 5 この規則施行後、最初に任命される第15条第1項第6号から第10号までの委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成24年3月28日改正）

- 1 この規則は、平成24年4月1日から施行する。
- 2 この規則施行後最初に選出される第15条第1項第8号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成26年 3月26日改正）

この規則は、平成26年 4月 1日から施行する。

附 則（平成27年 3月26日改正）

この規則は、平成27年 4月 1日から施行する。

附 則（平成28年 3月25日改正）

この規則は、平成28年 4月 1日から施行する。

附 則（平成29年 3月22日改正）

この規則は、平成29年 4月 1日から施行する。

附 則（平成30年 3月28日改正）

この規則は、平成30年 4月 1日から施行する。

資料 8：国際交流推進センター運営委員会名簿

（平成30年 4月 1日現在）

国際交流推進センター長	理事	寺 本 憲 功
国際交流推進副センター長	（欠員）	（ 欠 員 ）
専任教員・国際コーディネーター	准教授	山 田 直 子
専任教員	准教授	古 賀 弘 毅
専任教員	准教授	丹 羽 順 子
専任教員	准教授	布 尾 勝 一 郎
専任教員	講師	吉 川 達
国際コーディネーター	契約コーディネーター	山 田 佳 奈 美
国際マネージャー	課長	吉 田 規 雄

国際交流推進センター運営委員会委員

国際交流推進センター	センター長	理事	寺 本 憲 功
	副センター長	（欠員）	（ 欠 員 ）
	国際コーディネーター	准教授	山 田 直 子
	専任教員（日本語教育担当）	准教授	布 尾 勝 一 郎
	国際コーディネーター	契約コーディネーター	山 田 佳 奈 美
	国際マネージャー	課長	吉 田 規 雄
学術研究協力部	部長	市 山 郁 生	
教育学系	教授	早 瀬 博 範	
芸術学系	教授	吉 住 磨 子	
経済学系	教授	サーリヤ・ディ・シルバ	
医学系	教授	青 木 洋 介	
理工学系	准教授	カーン・エムディ・タウヒド	
農学系	講師	辻 田 忠 志	

大学情報

佐賀大学国際交流推進センター

Center for promotion of International Exchange Saga University

840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1 佐賀大学 国際交流推進センター

電話：0952-28-8203

Fax：0952-28-8819

<http://www.irdc.saga-u.ac.jp>